

---

ロックマンエグゼ

奇跡のロボットと科学者・・・！

銀色の闇

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ロックマンエグゼ

奇跡のロボットと科学者・・・！

### 【Nコード】

N3339M

### 【作者名】

銀色の闇

### 【あらすじ】

キャッシュとフロントムナビとの戦いから約一ヶ月がたった時だった・・・。今、各地で起きている謎のテロ事件。そんな中に熱斗たちのクラスにちよと変わった能力を持つ一人の少女がやってきた！実はそんな彼女には、悲しい過去が！？そして、光裕一郎の若き過去も・・・！光家と少女にはどんな関係が！！孤独な少女との出会いが熱斗達の運命を大きく変える・・・！？彼女の中に眠る憎しみの塊の正体とは！？



## すべての始まり（前書き）

字の打ち間違いがでるかもしれません。すみません。後、ボーカリストはお話の中には、出てきません。出てくるのは、歌ぐらいです。

## すべての始まり

暗闇の中・・・低く押し殺した女の声がした・・・。

??? 「許さない・・・許さない・・・絶対に許さない!!」

その憎しみと絶望が混ざった声は静かに闇に消えていった・・・

そして、ある一人の少女と大きい犬と猫が山から秋原町を眺めていた。

少女「……ここが秋原町……」

大きい犬と猫が少女を心配そうにみた。でも、その少女からの目からは、光が満ちていた。

少女「大丈夫だよ……。次こそ見つけてみせるから・  
」

うゆって山を下りる少女と犬と猫・・・・。

そ

少し強い風が吹いた。

そうこれがすべての始まりだった・・・。

すべての始まり（後書き）

こんばんは！！そして、はじめまして！

銀色の闇です。人生初小説を

書かしてもらいました。

どうだったでしょうか？よかったら感想をおねがいします。





朝

RRRRR!!-RRRRR!!-RRRRR!!-RRRRR!!-

音が鳴り響いていた。

ある一軒家やかからアラームの

クマン」ねっ・・・とくん・・・ねっと・・・くん・・・熱斗君てっば  
ロッ

E-Tから青いナビが自分のオペレーターを起こしていた。

青色のP

ロックマン「学校遅刻しちゃうよ!!..起きて!!」

熱斗「うん...あと五分...」

もぞもぞ動いてスミターで寝てる熱斗。

ロククマンン」も………

起きろ！……光熱斗！………！」

「………」半熱

あまりのロッシ  
クマンの声の大きさに驚いてベットから落ちてしまった熱斗。

熱斗「ロックマン、も

うちよっと優しく起こせよな!..!」

ロックマン「それじゃ起きな

いでしょ熱斗君は!..!それよりいいの学校?」

熱斗「えっ?..う..うわあ..」



る番」「あら、おはよう熱斗。ごはんも作って置いてあるわよ。  
テ は  
ーブルに」

母、はる番は、ゆっくりとした口調でしゃべた。

熱斗「ありがとう、ママ」

急いでごはんを食べて、玄関へ向かった。

熱斗「いってきますー!」

ロックマン「いってきます、ママ」

半透明でホログラム状態で人差し指ぐらいのロックマンが言った。

はる香「いつてらしゃい、気をつけて行って来るのよー！」

インラインスケートで飛ばして約10分後・・・  
。なんとか学校に間に合った熱斗であった。





朝（後書き）

こんにちは！！銀色の闇です。どうだったでしょうか？

感想お待ちしております。

転校生？（前書き）

字の打ち間違えがあったら、すみません。

転校生？

学校についた熱斗は自分のクラスへ向かった。そして、見覚えのある赤色の髪をした熱斗と同じ年ぐらいの少女と半透明でホログラム状態のピンク色のナビが話しかけてきた。

メール「熱斗！！おはよう」

ロール「はあ〜い！ロック」

熱斗「あ、メールちゃん！おはよう」

ロックマン「おはよう。ロールちゃん！」

元気よくあいさつする四人。いっしょにクラスへと向かった。

メイル「あ、  
そつだ。今日来るのよね！転校生。どんな子かしらね」

熱斗「転校生??？」

メール「んもおく・昨日まりこ先生が言った  
じゃないの!」

ほぼ呆れながら言うメール。

ロックマン」

あははは!熱斗君らしいね」

ロール」うふふふ！そうねロックマン」

みんなは、ちゃんと聞いていて、自分は、ちゃんと聞いてなかったと言っ事実。そのことを聞いて、顔を赤くする熱斗。

熱斗「う・・・うるせえ！！！」

やいと「おはよう。二人共」

クラスの前に立っていた  
金髪で三つ編みのキラリと光るおでこが特徴のどう見ても熱斗達よ  
り年下の少女がいた。でも、彼女も熱斗達と同じクラスだ。

メール「おはよう、やいとちゃん」

熱斗「おはよう、やいとちゃん」

グライド「おはようございます。ロックマン、ロールさ  
ん」

ロックマン「おはよう、グライド」



ロール「おはよう、グライド」

透「あ、熱斗君達だ！」

デカオ「あ~~~~!!熱斗、お前俺のメールちゃんからはなれる！」

さらに、クラスの中から二人男の子が出てきた。

熱斗「透君、デカオ！おはよう~!!」

メール「おはよう、透君、デカオ君」

透「ねえ、確か今日来るんだよね。転校生」

メール「あ！やっぱり、みんなも気になってた？」

やいと「当然よ！新しいクラスの仲間が来るんだもの！！」

デカオ「でも、どっちなんだろうな？男か女か？」

熱斗「ああ！！楽しみだぜえ！！！！そいつ、ネットバ  
トルできるかな！？なあ、ロックマン」

ロックマン「そうだね、熱斗君」

やいと「まったく・・・あいかわらずねえ」

メイル「まあ・・・それが熱斗と」

ロール「ロックマンだからねえ」

透「そうだね」

デカオ「そうだな」

それを聞いてたナビ達もこういった。

グライド」そうですね

ガッツマン」でガスね

アイスマン」そうですねえ〜

キーンコンカーコン、キーンコンカーンコン・・・。

透「あ、チャイムだ・・・」

やいと「みんな、さあ、座りましょう」

やいとがそういってみんながクラスの中に入り自分の席についた時だった。ちょうど、クラスに女の先生が入ってきた。

まりこ先生「は  
く、朝の会を始めます！後、今日来ると言っていた転校生なんです  
が・・・」

みんながいよいよだと思った瞬間だった。

まりこ先生「実は・・・まだきていません！！」

全員「えええええっつっ！！！！！！」

まさかの転校初日の遅刻かよ！！誰もが起こったのは、  
言っ  
までもないだろう・・



転校生？（後書き）

こんばんはー！！銀色の闇です。

はっきりにってすごい時間がかかり  
ました！これ！！



息をぜえぜえする少女。

ゆめのみづき

まりこ先生「も・・・もしかして・・・夢野美月さん・・・？」

少女を見て恐る恐るその名をいったまりこ先生。頷く少女。

みづき「は・・・はい・・・私が夢野美月です・・・」

そつゆつ言ってクラスの中に、入ってくるみづき。

みづき「遅れてきてすみません。こんにちは、私が夢野美月です」

まりこ先生「え・・・えっと・・・みづきさんの席は・・・っと・・・」

突然のできごとに、少々ビックリしながらもみづきの席を決めるまりこ先生。

まりこ先生「じゃあ・・・光くんの席の後ろが空いてるからそこでいい？」

みづき「・・・光・・・！・・・私は別にいいですよ・・・光さんがいいなら・・・」

生徒全員の視線が熱斗に向けられた。

熱斗「えっ！俺！！お、俺なら別にいいぜえ！」

まりこ先生「じゃあ決まりね！よろしくね、みづきちゃん」

みづき「はい、よろしくお願いします」

みづきは、そついい自分の席へついた。

熱斗「俺は、光熱斗！ナビは、ロックマン！・・・よろしく、後俺のことは、熱斗でいいよ」

ロックマン「よろしくね！みづきちゃん」

みづき「・・・あぁ、うん・・・よろしく、熱斗、ロックマン！」

ニツコリと笑うみづき。よく見ればかわいらしい子だ。髪は、肩に付かないか付くぐらいの髪を垂らしていて、黒と茶色が混ざった、なんとも絶妙な色。目や鼻や口は、子供らしい感じが出る。

まりこ先生「あら！やだ！！一時間目体育だわ！みんな、急いで準備してください！！」

生徒全員「は~~~~い！！！！」

10分後……。着替え終わって、みんなグラウンドに出て、授業が終わった……。みんな教室に戻ろうとしていた。

熱斗「あ~~~~！！やつと終わったぜ持久走！！」

メール「そうねえ〜さすがに疲れたわあ」

やいと「はあ……。いやあになちゃうわあ……。ねえみづきちちゃん」

みづき「うん！！」

透「でも、みづきちゃんけっこう速かったよね！僕、2〜3周抜かれちゃたよ」

デカオ「俺もあんなにはやくなりたいぜ！」

そんな話をしながら教室へ向かっていると、女の子の悲鳴が聞こえた。

生徒A「きゃ〜〜〜！！！」

生徒B「うわぁー！！！！！！！」

生徒C「いやだぁ〜〜〜！！！」

次々聞こえる悲鳴。

熱斗「なんだ！！！」

メイル「鶏小屋の方からよ！！！」

ロックマン「熱斗君！行ってみよう！！」

熱斗「ああー！！！」

鶏小屋に向かう熱斗。

メイル「私達もいくわあよ！」

やいと・透・デカオ・みづき「」「」「うん！！！！」「」「」

さきに現場ついた熱斗とロックマンが目にしたのは……。

熱斗「な・・・なんだこれ！！！」

熱斗達が目にしたのは、生徒達が鶏に襲われたり、追いかけていた。

生徒D「すみません！僕が、鶏の小屋の鍵をかけるのを忘れたせいで鶏達が出てきちゃたんデス」

どうやら原因は、鍵の閉め忘れらしい。

鶏達「コッケー！！コッコッ！！……！！」

鶏達が熱斗を襲ってきた！

熱斗「うおおあ！！あぶねえな！！！！」

どうにか攻撃を避けた熱斗。

デカオ「ヤバい！熱斗が！！」

ようやくついたメール達。

みづき「……ここは私にまかせて！みんなはここにいて！」

メール「えっ！？ちよ、ちょっとみづきちゃん！まさか！！？」

やいと「やめときなさいよ！あぶないわあよ！！」

透「そっだよ、やめたほうがいいよ！！」



みづき「……………」

みづきは、みんなのそんな言葉なんて聞かずに熱斗の方へ行ってしまった。

熱斗「うわぁっ!!」

さつきから鶏が猛攻撃してくる。

熱斗「くっ……………」

ヤバいっと思った時だった。みづきが急に来て、熱斗の目の前に立っていた。

熱斗「おっ……おい！危ないみづき!!」

急いで自分の後ろに回そうとみづきの肩に手をかけたがみづきがそれを止めた。

みづき「大丈夫……とにかくここは私にまかせて!」

熱斗「??わっ・・・わかった・・・」

熱斗は、ただうなずいた。

転校生は動物使い！？

鶏達「コケー！！コッココー！！」

鶏達がついにみづきに襲ってきた。

熱斗「あ・・危ない！！避けるみづき！」

熱斗が叫んだ！！その時だった・・ピッタリと鶏達が止まって人を襲うのをやめた。

みづき「……ピピピ……ピピピ……ピピピ……ピピピ……ピピピ……ピピピ……」

草笛だ・・とっても美しいメロディだ。

ピピピ……ピピピ……ピピピ……ピピピ……ピピピ……

……ピピピ……ピピピ……ピピピ……ピピピ……ピピピ……

・・・

ピュウ〜・・・ピュウ〜・・・ピュウ〜・・・

みづき「・・・もう大丈夫・・・ほら小屋に戻りな・・・」

鶏達「コツケ〜・・・コツコ〜！」

みづき「ふふふ！・・・そう小屋は、あっちよ」

ぞろぞろ小屋に戻る鶏達。

熱斗「・・・す・・・すげえぜ！！みづきお前もしかして、動物と話せるのか！？」

目をキラキラして聞いてくる熱斗。

メール「お〜い・熱斗!!」

熱斗「あ！メールちゃん達だ」

熱斗とみづきのところを駆けてくるメール達。

透「大丈夫だった？熱斗君」

デカオ「みづきちゃんも大丈夫だったか〜？」

デカオが心配そうにみづきを見る。

みづき「ええ・大丈夫・それより、熱斗は・・・？」

熱斗「ん？ああ俺なら大丈夫！それよりすごかったなあ今の！ー！なあロックマン」

ロックマン「うん！僕もビックリしちゃたよ」

やいと「なになに！それって！..！」

気になるやいと。

熱斗「いや〜それが実は、みづきがさあ・・・」

今さっきあったこと話そうとしたら・・・。

みづき「わあああ〜..！」

熱斗の口を急い手でふさいだみづき。

熱斗「んぐっ！んんん！むぐんんん！..？」

ロックマン「み、みづきちゃん！..？」

隣にいたロックマンも驚く。

みづき「メールちゃん！私たちこのさわぎのこと先生達に言わないといけないからさきに教室に戻ってきてくれる!？」

メール「あ・うん、わかったわ」

みづき「じゃあ行くわね、熱斗行くわよ」

熱斗をピツパリながら職員室へ向かうみづき。

熱斗「なっ、なんなんだよ!!」





転校生は動物使い！？（後書き）

こんばんは！！銀色の闇です。3話をちよと改造しました！誰か気が付いてくれ  
たかな？

信じる仲間……

無言で熱斗を引っ張るみづき。

熱斗「お、おい！どこまで行くんだよ！！」

みづき「……………ってなことしないで……」

そつゆってようやく足を止めて熱斗を引っ張るのをやめた。

熱斗「ええ！なんつたか聞こえないよみづき！！」

みづき「勝手なことしないで！私は、動物と話せることは誰にも知られたくないの！！」

怒鳴るみづき。

ロックマン「えっ！？なんでなのみづきちゃん」

ロックマンがホログラム状態でてきた。

みづき「そ、それは……! ……みんなに嫌われたくないから……」

熱斗「なんで? すげーいじゃん!」

みづき「……熱斗は、そう思ってるけど……みんなはそうは思ってくれない……きつと……」

ロックマン「みづきちゃんは何でそう思うの?」

みづき「……私が前に住んでいたところの人たちが言っていたのよ……!」

みづき「気持ち悪い……って」

みづきは悲しそうに言った……。

熱斗「!...ひでえな...そいつら...!」

ロックマン「...うん!」

熱斗とロックマンの言葉に怒りの感情が混ざってた。

みづき「だから...いやなの...せかつくみんなと仲良くなれたと思ったのに...!」

熱斗「でも...メールちゃんたちは...絶対にそんなこと思わない!」

ロックマン「ロールちゃんたちも!」

みづき「でも...!」

熱斗「みづき!...お前は...メールちゃんや透君やデカオとやいとちゃんがひどいこと言う奴に、みえるのか!」

ロックマン「確かに...人をそう簡単に信じるのは難しいか

もしれない・・・でも、信じる仲間がいると、とても心が温かくなるんだあ・・・」

みづき「信じる仲間か・・・」

熱斗「みづき・・・いいのか？このままじゃ嘘の自分を背負っていくんだぞ・・・？」

とつてもみづきには優しい言葉だった・・・。

みづき「私にもできるかな？・・・その・・・信じる仲間って奴・

」・

熱斗&ロックマン」「できるよきつと！」「！」「」

につこり笑う熱斗とロックマン。

みづき「・・・ありがとう二人共・・・！」

熱斗「・・・？・・・なんかいったみづき??？」

みづき「……ううんなんでもない！行こう熱斗！」

熱斗「ああ！いこうぜえみんなのところだ！！」

ロックマン「よかった……みづきちゃん元気になってくれて

」！

教室に戻る二つの影……でもこの言葉がああ悲劇を起こすとは  
まだこの時は、誰も知らなかった。

信じる仲間・・・(後書き)

どんなことになるんでしょうー!!

準備！

キーンコーンカコーン・・キーンコーンカコーン・・・放課  
後。

マイル「ええええつつっ！！みづきちゃん動物と話せるの  
!?!」

透「すごい！だから、あの鶏達あんなにすんなり小屋に入っ  
てたんだ!?!」

熱斗に説得せれ、マイルたちに自分の能力のことを話した。

やいと「そうゆうことだったのね。んもく水くさいわねえー  
みづきちゃんも!?!」

デカオ「そうだぜえみづきちゃん、俺たちは、友達で仲間な  
んだからよ!?!」



その言葉に驚くみづき。

みづき「……！」「こわくないの？変じゃないの？」

メール「なんで？とてもすごいじゃないの、ねえやいとちや  
ん！」

やいと「ええ！」

熱斗「なあ！大丈夫だったろ」

みづき「うん！……熱斗に話してよかった！」

熱斗「あ、そうだ！みんな今日科学省に行こう！」

メール・デカオ・やいと・透「賛成！」

みづき「？科学省って・・・なに？」

ロックマン「科学省ってゆうのはいろいろな事件のデータや実験のデータとかを扱ったり、実験をしたり、すごい場所なんだよ！そして、そこで熱斗君のパパが働いてるんだよ」

みづき「熱斗のお父さんが・・・！！・・・ふん・・・」

熱斗「どう？みづきも一緒に行かない？？」

みづき「私、行きたいんだけど・・・でも、私の家族も連れてきていい？」

熱斗は、心良くOKをくれた。

熱斗「いいぜえ！どんと来い！！」

みづき「……ニアリ……！……ありがと熱斗！」

熱斗「じゃあ2時に秋原公園に集合な！」

メール「うん」

やいと「わかったわ」

透「了解！」

デカオ「遅れるなよ！熱斗」

熱斗「わかってるて！」

そうゆってそれぞれ家に帰っていった・・・。



準備！（後書き）

銀色の闇です。応援よろしく!!

ち・こ・く？

約束の時間の2時・・・メール・デカオ・やいと・透、そして、なんといつもは、必ず遅れてくる熱斗も今日は、ちゃんと2時に秋原公園に来た。・・・10分後。

熱斗「あああああ〜！！みづきがこねえ・・・。せつかくこの俺が早く来たってゆうのにお」

メール「熱斗はいつも遅すぎなのよ！・・・でも、確かに来ないわね〜・・・みづきちゃん・・・」

デカオ「でも、熱斗。お前、ちゃんとみづきちゃんのPETに地図を送ったんだろっな？」

熱斗「送ったよ！なあロックマン！..」

ロックマン「うん。ちゃんとみづきちゃんのPETに地図を送ったよ」

ロール「ロックマンが言うんだから間違いないと思うし・・・」

透「きっと、新しい場所だから迷ってるんだよ」

グライド「そうかもしれないですね」

熱斗「でもさあ・・・地図、一応持ってるんだし、さきに行っても大丈夫じゃね？」

やいと「それもそうね」

メール「じゃあ・・・みづきちゃんにメール送らないと・・・よし！頼んだわよ、ロール！」

ロール「OK！メールちゃん」



メイルのPETTから消えたロール。

「熱斗」よしー！ー！ーじゃあ科学省に出發！」

メイル・デカオ・やいと・透「「「「「おお〜！ー！ー！」「「「「

ち・じ・く？（後書き）

短くてすみません・・・ぐすぐす。。。

科学省！

熱斗「よし、科学省についたぞ！」

熱斗達は、無事に科学省についた。

ロール「ただいま！メールちゃん」

みづきにメールを出しに行ったロールが戻ってきた。

メール「おかえりロール！それでどうだった？」

ロール「うんそれがねえメールちゃん。メールは、ちゃんと渡したんだけど・・・みづきちゃんなんかPETをオフモードにしてるのよ」

熱斗「ええ！なんでなんで？」

ロール「それがわからないから話たの！・・・それにみづきちゃんのネットナビらしきナビも、いなかったし・・・」

透「確かに少し変だね・・・」

やいと「でも、オフモードってことは、きっと電話にもできないとも思っし・・・」

デカオ「とゆうことは・・・みづきちゃんがここに来るのを祈るしかないなあ・・・」

メール「大丈夫よ、みづきちゃんなら！みづきちゃんにわるいけど、しかたないわね先に中に入りましょ！！」

ーについで、熱斗達は、科学省の中に入っていた。科学省のロビーについた。

熱斗「パパ！」

光博士「お！熱斗じゃないか。それにメールちゃんたちも！」

メール「こんにちは！おじさん」

透「こんにちは！」

デカオ「こんにちは！おじさん」

やいと「おじさま、こんにちは！」

光博士「どうしたんだい？みんな」

光博士は、熱斗たちに聞いた。

熱斗「新しい友達を紹介に来ただけど・・・実は、まだそいつが来てなくてさあ」

熱斗は苦笑いをした。

光博士「新しい友達？誰だいその子は？」

メール「女の子で、夢野美月ちゃんってゆづんですよ」

メールがみづきのことを話した。

光博士「夢野？・・・」

熱斗「どうしたの？パパ」

光博士「いや・・・なんでもない・・・ああ、それより熱斗、隣の会議室に行つて来なさい」

熱斗「え？なんで？」

光博士「行けばわかるよ。さあ、行ってきなさい。私も後で行くから」

っといって優しく笑う光博士。

熱斗「うーん．．．なんだかよくわかんないけど、わかった、行って来る！」

メール「えっと．．．私たちは．．？」

光博士「ああ、メールちゃんたちも一緒に行きなさい」

メール「はい！わかりました」

ウィーン・・・元氣良く熱斗たちは、ロビーを出てた。

光博士「・・・夢野か・・・懐かしい名前だな・・・元氣にしてるかな？あいつら・・・」

光博士は、一枚の写真を手に取る。その写真には、若かった光博士と、見知らぬ若い男性と女性が仲良く移っていた。

光博士は、なぜかとても悲しそうにその写真を見つめてった・・・。





科学省！（後書き）

こんにちは〜！銀色の闇です。ちゅんちゅんなるんぞじゅんちゅん  
の  
続き……。

遅れ

ウィーン……会議室。

熱斗「なにがあるんだって……」

ジャスミン「あゝゝ！熱斗ネ！お久しぶりネ！！」

熱斗に抱きつくジャスミン。

熱斗「ジャ・・ジャスミン！？」

メール「な・・なんてことしてるのよ、あなた！！」

熱斗に抱きついてるジャスミンをみて怒るメール。

チャーリー「よう。モテる男はつらいなあ〜熱斗」

燃次「おう、熱斗。元気にしてたか？」

熱斗「チャーリー！燃次さん！それにみんな！！どうしてここに！？」

この会議室の中に元クロスビュージョンメンバー8人がいた。

ミヤビ「お前の親父殿に呼ばれてな」

ゆり子「まあ、みんなそんなところね」

熱斗「あ！ゆり子！・・・お前大丈夫なのか？」

ゆり子「ええ、デューオの事件のことで、罪は少しは軽くなっ  
たわ。私がやったことには、変わりないけどね・・・」

熱斗「き・・・気にするなよ・・・そんな顔してたら、まりこ先生が悲しむぞ?」

みんなも、知ってると思うが、まりこ先生とゆり子は、双子だ。昔、あったネビュラ事件の時は、敵同士だったが、今は、もう仲間だ。

ゆり子「そうね、今更悔やんでもしかたないわね」

Deinゴ「熱斗! ネットバトルしようぜ!」

デカオ「Deinゴ! お前、カレーの配達は、どうしたんだ?」

Deinゴ「えっ・・・あ・・・いや、その・・・」

デカオ「Deinゴ!」

ディンゴ「じいめんさい〜!〜!」

デカオ「待て〜!ディンゴ!〜!」

逃げるディンゴを追いかけるデカオ。

やいと「げっ!炎山、なんでここにいのよ!〜?」

炎山「俺も、光博士に呼ばれてな。それより、なぜお前がここにいる?答えろ」

やいと「わ、私は、ただ熱斗たちと、新しい友達をおじさまに紹介に来ただけよ!」

炎山「新しい友達?」

透「今日転校してきた夢野美月ちゃん、ちよとまだここに来てないんだけどね」

熱斗「それにしても本当に久しぶりだな。ジャスミンたちは電脳獣のとき以来だし、炎山やライカは、一ヶ月前あったキャシュの事件のとき以来だったな」

ライカ「ああ」

プライド「それにしても、なんなんでしょう？光博士の話とゆうのは・・・？」

テスラ「ホントね、早く帰ってマンカンゼンセキ弁当を食べたいのに！」

ウィーン……。

光博士「すまないみんな、遅くなった。さあ、今すぐ話しをしよう……」

ウィーン・・・また、誰かが入ってきた。

みづき「あゝ！やっとついた・・・」

メール「あ！みづきちゃん！！」

熱斗「おい！遅いぞみづき、なにやってたんだよ」

みづき「ごめんごめん！ちよと小鳥さんたちと遊んでたら遅れちゃた、あつ、そうだ、熱斗伏せた方がいいわよ？」

熱斗「は？なんで・・・？」

みづきに聞こうとしたときだった・・・突然、大きいものが自分にタックルしてきて、のしかかって来た。



熱斗「いつて〜っ！な、なんだ？」

犬「ワン！」

みづき「こら！レイア！！人に飛びかかっちゃ駄目って何回も言ってるでしょ！」

レイア「クウ〜ン・・・」

しづしづと熱斗から離れた。よくみるとみづきの肩に猫が乗っていた。

メール「すごい〜！大きいワンちゃん！！」

ジャスミン「ホントネ！なんのってゆう犬種ネ？」

みづき「ベルジアン・シェパード・ドックってゆう犬種で、名前は、レイア」

レイア「ワン！」

普通のシェパードに比べると少し、毛の色が薄い。

みづき「んで、こっちの猫がラッシュ、雑種よ」

茶色の毛と白い毛で、瞳の色は、黄色で、まるで小さい虎みたいだ。

やいと「かわいい〜！もしかして、みづきちゃんが言ってた家族ってこの子たちのこと？」

みづき「うん」

熱斗「なんだそりゃ〜」

みづき「あら、なんで？私は、人間を連れてくるとは、一言も言っていないけど？」

熱斗「うっ……」

ロックマン「やられたね熱斗君！」

くすくす笑うロックマン。

光博士「……君がみづきちゃんかい？」

みづき「あ……はじめまして……」

プライド「あの子が、熱斗の新しいの友達ですか？」

熱斗「うん」

デカオ「でもさすが、動物使いだぜ！」

みづき「ちょっ・デカオ！」

炎山「動物使い？」

透「みづきちゃんは、動物とお話ができるだよ」

みづき「透君まで……」

燃次「そりゃ〜すごいなあ、この嬢ちゃん！」

みづき「……べ、別に動物だけじゃなくて、木や花や植物とも話ができるけど……」

燃次「へ〜！すげえなあ〜・・・なあ、ネンジ郎！」

ナパームマン「だから、俺は、ネンジ郎じゃねえ！ナパームマンだ！！！」

熱くなる、燃次のPET。なぜか、ナパームマンが怒るとPETが熱くなる。

燃次「あち！」

ディンゴ「でも、本当に動物と話せるのか？こいつ」

その言葉にカチンときたみづき。

みづき」「……レイア、ラッシュ……あのトマホーク野郎を懲らしめてきて……!」

レイア「ワン……!」

ラッシュ「ミャー……!」

ディンゴ「な、なんだ! う、うわぁぁっ……!」

トマホーク「お、おい! ディンゴ……!」

ディンゴ「う、うめんって。冗談だよ、じょーだん……!」

みづき「ふん……!」

炎山「……………どうやら、本当のようだな」

その光景をみて、みんな少し、みづきが怒ると怖いなと思ったのであった。





遅れ（後書き）

こんばんは〜！なんか、ディンゴが少しかわいそう〜！全国のディンゴファン  
すいやせん〜！

緊急事態！！？

光博士「……さあて、話でいいかな？」

熱斗「あつ、そうだった、話ってなんなのパパ？」

光博士「この間から、世界各地で起こっているテロ事件のことは、もうみんなは知っているか？」

炎山「なぜか、銀行のお金がなくなったり、ダムを破壊されたり、火力発電所を爆破され大騒ぎになっているのに、手がかりが一つも掴めないとゆうあのテロ事件ですか？」

光博士「ああ、そのことについてつい最近わかったことがあるんだ」

ライカ「それは、ホントですか、光博士！？」

光博士「この前、アメロッパで火力発電所が爆破されて、そのとき使われたと思われる爆弾に、なんと、ネビュラのマークがあった……！」

ミヤビ「なんと！」

ロックマン「そんな……！」

熱斗「なんでだ！？確かにあのときみんながネビュラは、潰したはず……！それにリーガルは、もう……！」

そう……デューオに全エネルギーを吸われ死んだはず……。

光博士「落ち着け熱斗！まだリーガルがこの事件に関わっていると言うことは、まだわかってない。それに、ここに元クロスヒュージョンメンバーを集めたのは、この事件に協力してもらいたかったからなんだ」

ゆり子「私たちに・・・？」

光博士「そうだ、君たちに力を貸してほしいんだ」

ジャスミン「・・・私やるネ！ねえ、メデイ！」

メデイ「ええ！」

ディンゴ「おっしゃー！いつちよやるかー！トマホークマン」

トマホークマン「ネビュラなんかトマホークのサビにしてや  
るぜー！ディンゴー！」

「シャイロマンン」  
「びびるる？キャラクターリ」

「チャーリー」「決まってるだろジャイロマン！俺も参加するぞ」

「ミヤビ」・・・しかたない、やるぞシャドーマン」

「シャドーマン」・・・御意」

「ライカ」「俺たちもやるぞ、サーチマン！」

「サーチマン」「はっ！ライカ様」

「プライド」「私も、世界の平和のために戦います！ナイトマン」

「ナイトマン」「お嬢さまのおおせのままに！」

燃次「この男六尺玉燃次！世界のためなら喜んで協力させてもらっぜー！なあ、ネンジ郎？」

ナパームマン「だから、俺はネンジ郎じゃねー！！」

テスラ「ちようどよかったわ！このごろイライラしてしかなかったし、やるわよ！マグネットマン」

マグネットマン「テスラお嬢様のご命令なら！」

メール「やるわよ！ロール！！」

ロール「OK！メールちゃん」

ゆり子「……私たちも協力するわよ！ニードルマン」

ニードルマン「キシシシ！いつもより気合い入ってるじゃね  
か、ゆり子！」

炎山「準備はいいな、ブルース！」

ブルース「はいっ！炎山様」

熱斗「よし！俺たちもやるぞ、ロックマン！！！」

ロックマン「うん！熱斗君」

デカオ「俺たちも協力するぞ！ガッツマン」

ガッツマン「でガス！」

透「僕たちで役に立つか、わからないけどがんばろうアイス  
マンー！」

アイスマン「はいですう！」

やいと「私たちががんばるわよ！グライド」

グライド「わかりました〜！やいと様！！」

みづき「私もこの能力が役に立つかもしれないから、協力し  
ますー！」

光博士「……ありがとう、みんな！」



光博士は、心からそう思った。そして、その瞬間、同時に爆発音と激しい揺れに襲われた。

熱斗「な、なんだ!？」

名人「大変です!光博士!!何物かがこの科学省を攻撃してます!」

光博士「なんだって!？」

ドカーン・・・!

熱斗「め、名人さん!ディメンショナルエリアを!!」

名人「わ、わかった!ディメンショナルエリア展開!」

ディメンショナルエリアが展開された。

熱斗「シンクロチップ・スロットイン」

クロスメンバー「「「「「「クロスヒュージョン!!!」」」

青い光に包まれた。パーン!

ロックマンCf「行くぞ!みんな!!!」

Cf達「「「「「おお!!!」」」」」

会議室から出てくCf達。

光博士「さあ、私たちも避難するぞ!急いでくれ、みんな!

やいと・透・デカオ・みづき・名人「「「「「はい!!!!!」

みづきは、熱斗たちが出た扉をみた。

みづき「……がんばって！熱斗、ロックマン！みんな  
！」

光博士「なにをやっているんだ、みづきちゃん！こっちだ！  
！早く！」

みづきは非常階段へ走った。それに、レイアとラッシュも続い  
た。

**緊急事態！！？（後書き）**

こんばんは！銀色の闇です・・・。

ぜひ、感想をお待ちしております。

## 人間改造ナビ

ロックマンCf「やめろー!!」

Cfたちは、敵のもとへついた。そこには、紫と黒の不気味な鎧と黄色に目をした、なんとも気味が悪い物が暴れていた。

???「ひゃひゃひゃひゃー!! やつとおでましかい?」

ブルースCf「なんだあれは?・・・人間か?」

???「ははははは! そう俺は、人間だ! でも、人間じゃない  
!」

???は、不気味に笑いながら言った。

サーチマンCf「どうゆう意味だ!！」

???「その言葉の意味どうりさあ!！」

ロールCf「じゃあ貴方は、ナビ?」

???「ひやははは!！確かにナビだな!でも、俺は、ナビじゃない!！」

ニードルマンCf「じゃあなんでって言うのよ!！」

???は、少し黙り込んだ。

???「……そうだな……俺は、人間改造ナビ!人間でもナビでもある最強の存在だ!！」

ブルースCF「なに!？」

トマホークマンCF「・・・そんなのありかよ!?!？」

シャドーマンCF「!・・・バカな・・・!」

マグネットマンCF「なにデタラメ言ってるのよ!そんなものありえるはずないでしょ!!!」

マグネットマンCFが怒鳴った。

人間改造ナビ「それがありえるからここに俺が存在する。ひやはははは!!俺は、Dr・リーガル様から造られた!」

ロックマンCF「なんだって!？」

ジャイロマンCf「まだ生きてたのか！あのじいさん……！」

ナイトマンCf「そんな……」

メディCf「ありえないネ……！！」

ナパームマンCf「……なんてえ……！」

絶句するCfたち。

人間改造ナビ「そして、組織の名は……新ネビュラ……！」

ロックマンCf「新……ネビュラ……！」





ナパームマンCf「バルカンアーム！」

トマホークマンCf「トマホークスイング！」

ナイトマンCf「ロイヤルレッキングボール！」

ニードルマンCf「ニードルキャノン！」

シャドーマンCf「カワリミッシュリケン！」

ドカーン！！・・・Cfたちは、一斉に人間改造ナビに攻撃をした。その場に土埃がたつた。

ロックマンCf「やったか！？」

人間改造ナビ「ひやははははははははははは！……こんなもんか！お前たちの力は！！」

ロールCf「そんな！？」

ブルースCf「攻撃が全然きいてない！！？」

人間改造ナビ「じゃあ今度はこっちからいくぜえ！ダークラックー！！！」

地面が大きく割れて熱斗たちを襲った。

Cfたち「「「「「「うわああああー！……！」「」「」「

「「「「「

ロツクマンCf以外みんなクロスヒュージョンが解けてしまった。

みづき「みんなー！！！！」

その様子をデイメンシヨナルエリアをとうして見ていたみづきは、悲鳴に近い声をあげた。熱斗たちのところに向かおうとしたら、デカオに手を捕まれた。

デカオ「駄目だ！みづきちゃん！！」

みづき「離して！デカオ！！」

みづきがデカオの手を振り払った。

デカオ「あ！みづきちゃんー！！！」

みづきは、ディメンショナルエリアに突っ込んだ。それを見ていた光博士たちは、弾き飛ばされると思った……。だが、みづきは、スウ・・つと体がとおりぬけた。

名人「なに！！？」

横たわるみんな・・ただ一人残ったロックマンCf・・・。

ロックマンCf「うっう・・・！！！」

人間改造ナビ「まだ生きてたのか……ひやははは！今度こそ  
デリートだ！！」

ロックマンCfの首を持ち、首を絞める人間改造ナビ。

ロックマンCf「うっう！くっああ！！！！」

炎山「……くっ……熱斗！！」

メイル「熱斗……！！」

人間改造ナビ「ひやひやひやひやひや！！！！！！」

大声で笑う人間改造ナビ。

みづき「やめる！…ばか！…！」

人間改造ナビに飛びかかるみづき。

ロックマンCf「うっ…！みづき…！…！」

人間改造ナビ「邪魔だ！」

みづき「きゃ…！」

壁に叩きつけられたみづき。

ロックマンCf「みづき…！…うっわ…！」

地面に投げられ、体を打つロックマンcf。そしてついにロックマンcfも変身が解けてしまった。



人間改造ナビ（後書き）

こんにちは〜！銀色の闇ですう〜！！！！

まだまだ感想お待ちしてます！

（評価もよろしく〜！！）

目覚めた力！！

熱斗「・・・うう・・・くっ！」

ロックマン「熱斗君！！逃げて！」

人間改造ナビ「ひやはははは！小僧共、今度こそデリートしてやるぜ！！」

人間改造ナビは手に黒い色のエネルギーをため始め、熱斗たちに撃とうとしていた。しかし、熱斗たちの前にみづきが出てきた。

みづき「そんなことさせない・・・させるもんか！！」

両手を広げて後ろの熱斗たちをかばうみづき。

ライカ「なにをやってる！？そこから離れるんだ！」

みづき「いや！絶対にいや！！」

大声で怒鳴るライカに負けにくいぐらいの大声で言ったみづき。

みづき「・・・私・・・はじめて友達ができたの・・・それなのにその友達を守らないで逃げたら・・・女がすたるてもんでしようが、ばかタレー！！！！！！」

熱斗「みづき・・・！」

人間改造ナビ「話は終わったか？・・・今度こそ、くたばれえ

「――!!」

人間改造ナビはそう言いながら、エネルギーボウルを熱斗たちの前にいるみづきにはなった。

ズドーン!!!!.....直撃だ.....その場に砂埃が舞った。

熱斗「みづき――!!!!」

メール「...そんな...みづきちゃん...!!」

ぼろぼろ涙を流すメール。

炎山「くそっ・・・!!」

人間改造ナビ「ちっ・・・!まあいいか・・・次こそ・・・!!・・・ん  
?」

砂埃のせいでよく見えないけど、人影が見えた。

人間改造ナビ「・・・?なんだ貴様は・・・ぐはっ!」

黒い影が一瞬で人間改造ナビの右肩から腰まで斬った・・・。

デインゴ「なんだ・・・?どうなってんだ?」

プライド」は・・・速すぎてよくわかりませんでした・・・！」

ジャスミン「あ・・・あれみてネー!!」

ジャスミンが指をさした先には・・・片手を剣の姿に変えていた少女がいた。

熱斗「・・・みづき・・・？」

確かに、服装と顔がみづきとまったく同じだった・・・。

けれど、髪の色は、美しすぎる銀色の髪と・・・

瞳の色は、人の血のように真っ赤な色・・・

そして・・・その瞳には光は、なく・・・

すっかり姿が変わってしまった・・・。

人間改造ナビ「き・貴様ああああ……!!!!」

みづきに斬りかかってきた人間改造ナビ。

みづき「……………」

人間改造ナビの攻撃をすばやく避けるみづき。

人間改造ナビ「な、なにっ!？」



みづきは人間改造ナビの背後に回り、今度は両足を斬った。

人間改造ナビ「ぐはっ・・・！」

燃次「す・・・すげえ・・・！！」

ゆり子「私たち・・・12人でもかなわなかった敵を・・・あんな簡単に・・・！」

人間改造ナビ「・・・ただの人間ごときに負けるだど・・・？・・・ふざけるなああ！！！」

そう人間改造ナビが叫んだ後、みづきは、容赦なく人間改造ナビにあったネビュラのマークのナビマークの部分の真ん中を自分の手で刺した。

人間改造ナビ「……がっ……は……！」

みづき「……………」

みづきは手を抜いた。

人間改造ナビ「こ、こんなことをして……わかっているだろうな……！きつと……ネビュラが……いや……リーガル様が黙っていないぞ！……ぐっあああああ……！」

ドカーン…………。人間改造ナビはそう言いながら、爆発して消えていった。

みづき「……………」

ドサッ…………。みづきは元の姿に戻り、その場に倒れた。

光博士「みづきちゃん!！」

デイメンショナルエリアが解けて急いでみづきたちに寄ってきた。

光博士「みづきちゃん！みづきちゃん！！みづきちゃん！！！！」

光博士は、みづきの肩を揺らすのが、何の反応もないみづき。息はしているけれど、ぐったりしているみづき。

やいと「おじさま…みづきちゃんは…！！」

やいとは今にも泣きそうな目をして聞いてきた。

光博士「大丈夫、気を失っているだけだよ」

光博士はみづきを背負って、立つ。

名人「……とにかく、みんな科学省に戻ろう……」

熱斗たち「……はい……」「」「」「」「」「」「」「」

目覚めた力!! (後書き)

こんばんは! いや〜!! このごろ忙しくてなかなか書く時間なて・  
・・!

たぶん、また今度も書く時間がないかも・・。

夢の中

暗い・・・

じじはじじ・・・？

わたしどろどろしてみんなとじろじろ・・・？

そうだ・・・私・・・変な化け物にやられたんだ・・・

死んだの？私……

「……許さない……許さない……！」

誰……？



その声は、怒りと憎しみが滲み出ていた。周りの背景が変わった。  
・建物が破壊されていて、住人たちは、悲鳴をあげながら逃げまど  
い・・・そして、住人たちと建物を見境もなく、壊し、殺していた  
一人の幼女がいた。まだ四〜五歳ぐらいの銀色の髪と赤い瞳をした  
女の子が町を一晩で滅ぼしてた・・・。

????「許さない・・・！私から何もかも奪ったこの世界・・・  
人間共が憎い！！」

この町は・・・！？あの子は、もしかして・・・！

そう思った瞬間に背景が消えた。

そして、もう一人少女が立っていた。

よく見ると人間ではなく、ネットナビだった。頭にヘッドホンみたいなのを付けていて、真っ白な布をうさぎの耳みたいに頭の上に結んで、上の格好は、黒と白色のセーラー服で下は黒色の半パン。

胸に黄色いスカーフと三日月のナビマークがあった。肌は、黒と白色。髪の色と瞳の色は、銀色に赤色瞳だった。そして、腰のあたりまでの髪の長さがあった。

「???」憎い……この世のすべてが………みづきちゃん……」

消えていく謎のネットナビ。

お願い待って・・・!!

私あなたをずっと探してた!

行かないで・・・!置いてかないで・・・!!

ク・・・レ・・・ン・・・!

パチツリ……。知らない天井、周りには熱斗たちが心配している目で見ている。

熱斗「みづき！よかった、無事で！」

みづき「……。？……。あれ私なんでここに……」

よく見たらここは科学省だった。そして、自分は、ベットにいることに気が付いた。

炎山「人間改造ナビの戦いで倒れてしまったんだ、お前は」

メール「それにしてもよかった、みづきちゃんが生きてて！」

みづき「しめんね・・・心配かけて」「・・・」

メール「ううん、いいのよ。みづきちゃんが無事なら！」

みづき「ありがとう」

みづきはベットから降りた。

ディンゴ「おいおい、大丈夫なのかよ！？立って？」

みづき「大丈夫！もう元気よ！！」

燃次「か〜！すげなあ、この嬢ちゃん！さっきもあんなに強  
かったもんな〜！！」

みづき「はい？なんのこと？？」

頭に？マークを浮かばせるみづき。

ライカ「お前もしかして覚えてないのか・・・？」

みづき「だから、なんのこと？」

光博士「みづきちゃん、これを見てくれ」

光博士はさっきの変身したみづきの映像を出した。

みづき「……!」

光博士「みづきちゃんは、この姿に見覚え……？みづきちゃん？」

みづきの目から涙が流れていた。

みづき「そんな・・・！なんで・・・どうして私がクレンの姿に・・・」

熱斗「クレン？」

みづき「・・・ごめん熱斗・・・私帰る・・・」

熱斗「え・・・！・・・みづき・・・？」

みづき「・・・帰ろう・・・レイア・・・ラッシュ・・・」

走って帰るみづきとレイアたち。



熱斗「お、おい！みづき！？」

ただただ突然のことに熱斗たちは見るだけだった。

チャーリー「どうしたんだ？みづきは？？」

熱斗「そんなの俺の方が聞きたいぜ！」

ミヤビ「でも、アヤツなにか知っているな」

炎山「そうだな・・クレンとは一体なんなんだ？」

この日は、色々な謎があるまま終わった……。

夢の中（後書き）

こんにちは！今日から夏休みだぜ！！イエーイ（パチパチパチ！！）

クレンの格好は鏡音リンの格好を参考にしました！！

これからもよろしく！！（短っ！！）

尾行にチャレンジ！！歌姫現る！？

あの日から三日後……。今熱斗は学校帰りで今日は、珍しく一人で帰っていた。

熱斗「あいつ……。学校来ないな……」

ロックマン「うん……。あれ以来まったく連絡も取れないし……」

熱斗「……。なんだよあいつ……。急に泣いてさ……」

ロックマン「熱斗君、きっと何かわけがみづきちゃんにもあったんだよ」

熱斗「……………」

熱斗が急に近くにあった電信柱に隠れた。

ロックマン「?どうしたの熱斗君??」

熱斗「しー! ……今みづきがいたんだよ!」

ロックマン「えっ!?!どい?」

ホログラム状態になり、ロックマンが出てきた。

熱斗「ほら！あそこ」

横断歩道のところに確かなになぜか、マイクと缶とラジカセを持つたみづきがいた。

ロックマン「ホントだ……。でも、なんでマイクと缶とラジカセなんか持つてるんだろっ？」

熱斗「おもしろそうだから尾行しようぜ、ロックマン！」

いきなりの熱斗の爆弾発言。

ロックマン「えええっ！・・・ダメだよ熱斗君！！」

必死に止めるロックマンの言葉も聞かない熱斗。

熱斗「でもさあ、ロックマンも気になるだろ？ついでになんで俺たちを避けてのかも本人から聞こうぜ！！」

もうこうなった熱斗を誰も止められない。

ロックマン「はあ〜・・・わかったよ熱斗君でも、気を付けて  
よ」

熱斗「わかってるって！」

こうして熱斗の尾行が始まった・・・。

10分後・・・。



みづきをつけてから、ある場所についた。

熱斗「ミュージックストリート・・・？」

ロックマン「なんだろう？ここ」

熱斗「とりあえず、行こうぜ！」

奥に入っていた熱斗たち。奥の中は、みんな明るくてギターやト

ランペットなどいろいろな楽器を持ちながら歌ってる人や踊ってる人たちがいっぱい居た。

ロックマン「あっ！いた、みづきちゃん」

熱斗「ホントだ」

みづきは、道の端っここで準備をしていた。みづきも歌う準備をしていた。

熱斗「なにしてるんだ、あいつ？」

物陰に隠れながら様子を見る熱斗。

みづき「すー…はー…」

目を閉じてゆっくりと目を開けるみづき。

〜ロミオとシンデレラ〜

『 私の恋を悲劇のジュリエットにしないで 』

『 二つから連れ出して・・・ 』

『 そんな気分よ 』

『 パパとママにおやすみなさい 』

『 せいぜい いい夢をみなさい 』

『 大人はもう寝る時間よ 』

『 咽返る魅惑のキャラメル 』

『 恥じらいの素足をからめる 』

『 今夜はどこまでいけるの？ 』

『 噛みつかないで 』

『 優しくして 』

『 苦いものはまだ嫌いなの 』

『 ママの作るお菓子ばかり食べたせいね 』

『 知らないことがあるのならば 』

『 知りたいと思う 普通でしょ？ 』

『 全部みせてよ 』

『 あなたにならばみせてあげる私の・・・ 』

『 ずっと恋しくてシンデレラ 』

『 制服だけで駆けていくわ 』

『魔法よ時間を止めてよ』

『悪い人に 邪魔されちゃうわ』

『逃げ出したいのジュリエット』

『でもその名前で呼ばないで』

『そつよね 結ばれなくちゃね』

『そつじゃないと楽しくないわ』



『 ねえ 私と生きてくれる？ 』

『 背伸びをした長いマスカラ 』

『 いい子になるよきつと明日から 』

『 今だけ私を許して 』

『 黒いレースの境界線 』

『 守る人は今日はいません 』

『 越えたらどこまでいけるの？ 』

『 噛みつくほど 』

『 痛いほど 』

『 好きになつてたのは私でしょ 』

『 パパはでもねあなたのこと嫌いみたい 』

『 私のために差し出す手に 』

『 握ってるそれは首輪でしょ 』

『 連れ出してよ 』

『 私のロミオ 』

『 叱られるほど遠くへ 』

『 鐘が鳴り響くシンデレラ 』

『 ガラスの靴は置いていくわ 』

『 だから 早く見つけてね 』

『 悪い夢に 焦らせちゃっわ 』

『 きつとあの子もそうだった  
』

『 落としたなんて嘘をついた  
』

『 そうよね 私も同じよ  
』

『 だってもっと愛されたいわ  
』

『 ほら私はいじこゝろよ  
』

みづきの歌にぞろぞろ人が集まってきて、缶にお金を入れた。

『 私の心そつと覗いてみませんか 』

『 欲しいものだけあふれかえっていませんか 』

『 まだ別腹よもつともつとぎゅつと詰め込んで 』

『 ippsoanata no iukawakomademo umeteshimauka 』

『 demosorejajaimenai no 』

『 oookina hako yori 』

『 oosana hako ni shiawase wa aru rashii 』

『 どうしようこのままじゃ私は 』

『 あなたに嫌われちゃうわ 』

『 でも私より欲張りなパパとママは今日も変わらず 』

『 そうよね 素直でいいのね 』

『 落としたのは金の斧でした 』

『 嘘をつきすぎたシンデレラ 』



『 オオカミに食べられたらしい 』

『 どうしようこのままじゃ私も 』

『 いつかは食べられちゃうわ 』

『 その前に助けに来てね 』

シーン……パチパチパチ……！……！歓声が出てきた。

女性A「すごい、今日もいい曲だったわ！ありがとう！…！」

男性B「すごいなあ！まだ小学生なのに」

女の子C「お姉ちゃん、すごい…！」

男の子D「また今度歌ってね！」

みづき「ええ！また今度ね…！」

みづきはそう言って戸づけを始めるみづき。

熱斗「おーいー！みづきー！ー」

みづき「？・・・！熱斗どっへっ！ににに！？」

ロックマン「みづきちゃんを尾行してきたんだよね、熱斗君！  
」！

みづき「尾行？？」

熱斗「あっ！ロックマン余計なことゆっなよ！ー！」

ロックマン「本当のことをゆっただけだよ」

みづき「ふん・・・熱斗ってそうゆう趣味があったんだ・・・？」

みづきは目を細めて疑いの目で見てきた。

熱斗「そ、そんな目で見るなよー！悪かったってー！」

みづき「くすくす・・・反省してるから許してやるか！そつだ、私の家に来る？」

熱斗「えっ！いいの！？」

みづき」「うん。家で留守番してるレイアたちも喜ぶだろうし！」

そうして、熱斗たちはみづきの家に向かった。

尾行にチャレンジ!! 歌姫現る!?(後書き)

やっと歌を出せたよ!

YouTubeで歌を調べて聴いてくれたらいいな!!

うささんが歌ってるバージョンで、できたら聴いてほしいなあ!!

(みづきが歌っていると想像してさあ!! (笑)!!!)

じゃあ! バイバイ!!!

## 昔の私

歩いてから数分。シンプルなアパートについた。部屋の中もシンプルだ。

みづき「さあ、あがって」

熱斗「おじゃましてーすー」

レイア「ワンー」

みづきに飛びついてきたレイア。

みづき「ただいま、レイア」

熱斗「いつ見てもすごい迫力だな」

みづき「座って待ってって」

熱斗「わかった」

と言い、ソファに座る熱斗。

ラッシュユ「にゃ〜」



熱斗「お！ラッシュユ、元気にしてたか？」

ラッシュユ「んにゃ〜」

すりすり寄り添ってきたラッシュユ。

熱斗「あははは。よせよ、くすぐりたい」

みづき「はい、麦茶」

みづきは冷たい麦茶をコップに入れて熱斗に出した。

みづき「暑い、暑い」

熱斗「サンキュー」

熱斗は出された麦茶をグビグビと飲んだ。

熱斗「ぶはー！生き返ったぜ！！」

みづき「それはよかったわね」

となりで笑うみづき。

みづき「あ、もうお昼の時間だ」

ロックマン「ホントだ」

みづき「そうだ！熱斗一緒にお昼ご飯食べる？」

熱斗「え？でもお前のママとかパパに悪いんじゃないのか？」

みづき「……それなら大丈夫。うちの家……お母さんと  
お父さん最初からいないから」

熱斗「え？」

みづき「うち、一人暮らしなの」

ロックマン「そうだったんだ・・・」

みづき「4歳に両親が亡くなって、突然独りぼっちなちやて、それからずっとレイアとラッシュと私だけで生きていたんだ・・・あの時は酷く周りが冷たくて・・・悲しかったなあ・・・」

熱斗・ロックマン「・・・・・・・・・・」

熱斗（どうしよう・・・ロックマン！俺・・・なんかマズいこと聞いてしまった！・・・）

ロックマン（そんなこと言われても・・・とにかく、謝ろう！  
熱斗君！・・・）

小声で話す二人。

熱斗「なんかごめん・・・みづき」

みづき「？なんで熱斗が謝るのよ」

熱斗「いや・・・なんか雰囲気的に・・・」

ロックマン「僕もごめんね・・・」

みづき「ちょ・・・なに二人ともそんな暗くなって！！私が勝手にほじくり返したことだし、気にしないでよ」

熱斗「でも……」

みづき「あああ！もう気にするなってなあってんでしょが……」

熱斗「……」

バンっ！と手を机に叩いたみづきにびっくりした熱斗。

みづき「せつかくご飯食べるんだから暗い顔しない！おいしく食べられないでしょうが……」

熱斗「は、はい……」



みづき（）・・・友達と一緒に笑ったの初めて・・・！（）

その後も楽しくカレーライスを食べて、みづきがさっきの話をまたした。

みづき「実はねえ、熱斗。さっきの話には続きがあるのよ」

熱斗「ど、どんな？」

熱斗はまた暗い話ではないかとドキドキした。

みづき「大丈夫。今度は暗い話じゃないから、聞いて」

熱斗「わかった」



みづき「小さい時に私・・・一人になった私をたった一人のおじさんだけ・・・私にお金くれたり、壊れたPETを直してくれたり、お世話になった人がいるの・・・」

みづきは熱斗を見つめながら云った。

熱斗「？」

みづき「その人すぐにいなくなちゃたけどね・・・。そのおじさんの名前はね、光正・・・。あなたのおじいちゃんよ、熱斗」

ロックマン「!？」

熱斗「なんだって!」

その言葉を聞いてびっくりする熱斗とロックマン。

ロックマン「でも、なんで熱斗君のおじいちゃんが・・・？」

みづき「……………その話はみんなの前でするから！」

熱斗「え？どゆゆの意味・・・？」

みづき「いいから、みんなのとこるに行こう……！」

じつじつと、熱斗とロックマンとみづきは科学館に向かった。



昔の私（後書き）

くおまけ

レイア「ワン！（私たちも！）」

ラッシュ「ニアー！（俺たちも！）」

みづき「……レイアとラッシュはお留守番だからよろしく……！」

ラッシュ「にあ……！（なに……！）」

レイア「クウ……ン（そんな）」

おしまい……！

## 光家との関係

みづきたちは、なんやかんやで科学省にみんなを呼び出した。

炎山「で、なんだ？みんなに話したい話とは」

みづき「今話すから・・・でも、その前に光博士・・・あなたに聞きたいことがあります！」

光博士「？なんだい聞きたいこととは・・・？」

みづき「今から十三年前のある科学者の二人の名前・・・。今でも覚えていますか？」

光博士「!!」

メイル「なんの話？」

光博士「なぜ君がそれを・・・!?」

ゆめのまもる ゆめのあかり

みづき「その科学者の名は夢野護と・夢野明里・私の父と母」

光博士「子供ができていたのか、アイツら!!」

熱斗「え？何々、みづきのパパとママと知り合いなの？パパ！」

驚愕する光博士に対し、熱斗たちは訳がわからぬまま。

ライカ「すみません、光博士まったく話が掴めないのですが？」

光博士「あ、すまない」

みづき「私が説明するわ。昔の科学者友達だったのよ、私のお父さんとお母さんと光博士は・・・」

光博士「・・・大学で二人に知り合って・・・同じ科学者を目指していたせいか話もよくあって、二人と仲が良くなったんだ」

～回想～

十三年前

裕一郎「うわぁ！」

裕一郎は走ってきた男とぶかつかって手に持っていた紙を5、6枚落としてしまった。

護「あっ、ごめん！」

急いでしゃがんで紙を拾う護。髪は金髪で白衣の下は黒い長ズボンに緑のTシャツを着ている。瞳はとても綺麗なアクアブルー。ちよっと子供っぽい感じの顔つきだった。

明里「もう、護たら！！だから廊下で走ったら危ないって云ったのに！」

注意しながら一緒に紙を拾う女性。こっちの女の人は黒髪に黒色の澄んだ瞳だった。服装は、白衣の下はクリーム色の長袖にひざまでかかるぐらいのピンク色のスカート姿にとっても優しそうで大人っぽい感じだった。



護「うう……ごめんって謝ったじゃん……。？……これってもしかして！な、お前って科学者目指してるのか！！」

裕一郎「え！？あ……父が科学者でねえ、それで憧れて僕も科学者になりたくてここに来たんだ」

明里「へえ、実は私たちも科学者を目指してるんだ！」

護「なあなあ！お前名前なんて云うんだ？」

裕一郎「光裕一郎。そっちは？」

明里「私は夢野明里！よろしくね」

護「俺は夢野護だ！よろしくな」

裕一郎「二人とも同じ苗字なのか？」

護「違うよ。俺たち実は、夫婦なんだ。だから、苗字が同じなんだ」

裕一郎「えっ！君たち夫婦だったのか！？」

明里「何よ、その反応は！」

裕一郎「あはは、ごめん！ちよと驚いただけだよ」

こんな風にして出会った三人。

熱斗「ロッキングマン(ぎんぎん) (…!)

みづき「……………」

光博士「どうだ？護たちは元気か？」

熱斗「そんなことがあったんだ・・」

その話は、触れさせたくなかったのに！っ！と同時に思った熱斗とロックマン。

みづき「お父さんとお母さんは・・・もう、他界しました・・・」

熱斗・ロックマン（あちゃ〜！！！！）（）

なんか気まずい雰囲気が流れてしまった。

光博士「そんな・・・！」

友達の死・・・とても悲しい知らせだった。

光博士「いつに・・・？」

みづき「八年前に・・・火事で家が燃えてそれで・・・」

急にみづきを抱きしめた光博士。

光博士「すまなかった・・・。大変だったろう」

みづき「確かに大変だったですけど、大丈夫でした。正おじいさんに助けてもらいましたから」

光博士「え？父さんに？」

熱斗「でも、なんでおじいちゃんが？」

光博士はみづきを離した。

光博士「護と明里さんは、父さんと結構仲がよかったからな」

みづき「私は・・・ある人を探してここに来たの」

テスラ「ある人？」

みづき「人ってもナビだけどね」

ライカ「そのナビとはまさか貴様の・・・!?」

みづき「そう、私のナビ」

寂しそうな顔で答えるみづき。

みづき「火事で行方不明になっちゃた・・・」

透「そうか・・・だからみづきちゃんのPETにネットナビがいなかったんだ・・・」

みづき「だからずっと前から探してるの」

熱斗「そうだったのか」

みんなやっぱり少し気まずい。っとそんな空気の中に突然に警報が鳴った。

燃次「な、なんだ！なんだ！！」

名人「科学省がアタックを受けてます！！」

熱斗「大変だ！行くぞ、ロックマン！！」

ロックマン「うん、お願い！」

熱斗「プラグイン・ロックマンEXE・トランスミッション！」

熱斗は、ロックマンを科学省のプログラムにプラグインした。後のみんなもそれに続いて自分のナビをプラグインした。



光家との関係(後書き)

はぁぁぁ!! 疲れたー! 読者のみなさん、楽しんで見てもらえてますかな??

感想か評価をどうかよろしくー!!!

女の根性!!？

熱斗「プラグイン・ロックマンEXE・トランスミッション！」

ロックマンたちはアタックを受けているところへ行った。

ロックマン「お前は・・・！人間改造ナビ!!」

人間改造ナビ「ん？あゝもしかしてお前らか、14号を倒した奴らって云う奴らは・・・」

今度は人間改造ナビは、この前の奴とは雰囲気がまったく違っていた。体の色は黄色で赤色のヘルメットにオレンジ色の髪。しかも、より人間に近づいていた。

ブルース「14号？」

人間改造ナビ「アイツの名前みたいなものだ。ツて云ってもただあいつ弱い方で名前すらつけてもらえなかったただけだけだな。まっ、俺はそこそここのところだからな、名前ぐらいはある」

サーチマン「じゃあ、お前の名はなんだ？」

人間改造ナビ「俺の名前？・・・まっ、名前ぐらい・・・いいよね？いいぜ、教えてやる。俺の名は、レンダーース。ネビュラのナビだ」

ロックマン「・・・レンダーース！僕は君を倒す！！」

レンダーース「おゝ怖。。。でも、それは無理だな」

マグネットマン「なんだと！！！！」

ロックマンの後ろにいたマグネットマンが怒鳴る。

レンダーース「本当は科学省の機能を完全停止させるのが任務だったんだが・・・面白そうだし、いいか。相手してやるぜ」

どう見ても余裕ありありのレンダーース。

マグネットマン「なめやがって・・・！マグボール！！」

レンダーースにマグボールが連射され、レンダーースに見事当たった。

マグネットマン「フン！やはり口だけか・・・なっなに！！」

レンダーースは平然とその場に立っていた。

レンダーース「やっぱり・・・弱いな・・・さっさと片づけるか」

テスラ「そんな・・・！マグネットマンのマグボールが全然効いてない！？」

レンダーース「レンダーースライト！！」

マグネットマン「ぐあー！！！？」

突如落ちた雷に避けることができなかったマグネットマン。

ロックマン「マグネットマン!」

マグネットマン「くっ・・・くそっ!」

急いでメディはマグネットマンの体を見た。

メディ「ひどいデータの損傷だわ!同じ電気属性なのに、ここまでダメージを喰らうなんて!」

ロックマン「早く手当を・・・!」

ロール「ロッ、ロックマン!」

ロックマン「え?・・・なっ!??」

ロックマンたちはたくさんのウィルスと獣化ウィルス囲まれていた。

トマホークマン「しまった！」

レンダース「悪いな。あんまり遅いとリーガル様に怒られんだ。お前らはここでくたばれ」

ロックマン「ロックバスター！」

ウイルスを攻撃をするがなかなか数が減らない。

ナパームマン「つくそ！全然数が減らねえ・・・！」

熱斗「ヤバイ・・・みんなのヒットポイントが・・・！！！」

みづぎ「・・・」

ナビがないのでただ熱斗たちを見ることだけしかできない・・・。

（どつすれば・・・みんなを守れるの？）（

ドクンッ・・・

（私は・・・。私はみんなを・・・守りたい！でも、力がない・・・）

ドクンッッ・・・！

（力が・・・力が欲しい！！大切な人たちを守る力が！！！！）

ドクン！！・・・

歌って・・・みづきちゃん・・・

( (えっ!・・・誰!?) )

欲しいんでしょ・・・力が・・・

( (・・・うん!!) )

みづきは頭の中で聞こえた言葉を言った。

みづき「ボイス・メロディ・・・スタンバイOK!!」

熱斗「え・・・?」

メール「みづきちゃん・・・?」

みづきの頭に白いヘッドホンみたいな機械が現れた。



みづき「ボイス・メロディ!!! 起動開始!」

ヘッドホンが緑色に光った。

女の根性！！？（後書き）

銀色の闇「こんちはー！いや〜どうでしたか？・・・そうですか！素晴らしいですか！！」

熱斗「誰もそんなこと云ってないじゃん！」

銀色の闇「あれ？いたんだ、熱斗」

ロックマン「僕もいるよ〜」

熱斗「でっなんでいんの？」

銀色の闇「いやいやあ〜・・・ちょっと宣伝でもしようかと・・・（笑）」

熱斗「本当に〜？？」

銀色の闇「ほっ、本当ですよ！さあ次回のお話は・・・！」

ロックマン（話スラした！！）

銀色の闇「みづきの新しい力！ボイス・メロディの力が奇跡を起こしちゃうかも」

熱斗「かもって・・・」

銀色の闇「まあまあ、細かいことは気にしない！とにかく、すごいことになると  
思うから見ろよー！！」

ロックマン「なんで命令系・・・？」

熱斗「とにかく・・・」

熱斗&ロックマン&銀色の闇「次回もよろしく〜!〜!」!

よし!宣伝バツチリ・・!!

私は守る！！

みづき「ボイス・メロディ！！起動開始！」

～E S～

レンダー「残念だが・・・ここで終わりだ！」

ロックマン「うっ・・・（ダメだ・・・！やられる！！）」

レンダーがロックマンをデリートしようとした時だった。音が流れてきた。

『絶望に今』

『満ちてく夢なら』

『衝動が騙る未来』

『取り残された』

『自我が問い掛ける』

『暗闇の彼方へ』

『愛の行方を』

レンダーズ「レンダーズライト！」

ロックマン「くう・・・！」

痛みにたえようとギョツと目を閉じた。でも、いくらたっても攻撃はこなかった。

ロックマン「・・・？・・・」

不思議に思い目を開けた。ロックマンを守ったのは、地面から生えた七色のつるだった。

熱斗「大丈夫か？ロックマン！？」

ロックマン「うん、大丈夫・・・このつるがぼくを守ってくれた」

熱斗「つる？」

『何が真実か』

『オリジナルなのか』

『見失うだけの』

『この心の在り処』

『褐色の傷は』

『リアリティも無く』

『くすんだ視界に』

『ただ綺麗な 光 求めた』

『渴き切った咽を摩らして』

『紡ぎ出した言葉の最果てに』

『まだ届かない』

『明日は在るの？』

『独り彷徨つ』

『無限の虚構に』

『碧い空さえも知らず』

『目に見えるもの』

『それがすべてでも』

『すぐに崩れそうで』

『絶望に今』

『満ちてく夢なら』

『衝動が騙る未来』

『取り残された』

『自我が問い掛ける』

『暗闇の彼方へ』

『愛の行方を』



レンダー「うっ……！なんだこれは！！」

今度は、レンダーの足の下からつるが伸びていき、動きを封じた。

レンダー「うごけっ……ない！」

ウィルス「メットー！！！！！」

次は、ウィルスたちの悲鳴が聞こえた。

ロール「あ、あれを見て！つるがウィルスたちをどんどん倒していく……！！！」

熱斗「ロックマン！今のうちにあいつを倒すぞ！！！」

ロックマン「うん！熱斗君」

『罪と過ちを』

『遊ぶ世界』

『俯く私は』

『ah? メビウスの囚われ人』

『もう誰にも止められないの?』

『加速するイミテーションの夢を』

『歪むレールは』

『何処まで行くの?』

『抑圧された』

『無意識の中で』

『夢く願う確証』

『目醒めるための』

『私に成るため』

『醜い熱情と』

『深い痛みを・・・』

ナパームマン「いけ！ロックマン！！」

メディ「ここは私たちが引き受けたわ！」

ロックマン「ありがとうー！」

みづき（）そっだ・・・この感じ・・・（）

人を信じられなくなったのはいつからだろう・・・？

信じられる物の少なさに泣きたくなる作り物の世界

私に見えるのは現実感の無い在り様・・・

信じられるのは自分？

それとも

ココロから滲み出る「衝動」だけー？

熱斗「ロックマン！プログラム・アドバンス！！」

ロックマン「うんー！！」

『閉じ込められた』

『孤独の迷図に』

『泣きじゃくるキミも見えず』

『大切なもの』

『その意味も爛れ』

『フェイクに穢れてく』

『この現実<sup>ほんとう</sup>は果たして誠か』

『つかめるのは私だけ』

『わからないなら突き破ればいい』

熱斗「プログラム・アドバンス！」

『感情解き放て』

熱斗「ソード・ワイドソード・ロングソード！スロットイン！

」！

『絶望に今』

『満ちてく夢なら』

『衝動が騙る未来』

『取り残された』

『自我が問い掛ける』

『暗闇の彼方へ』

ロックマン「はあああ!!」

ロックマンの手に青い光を放っている巨大な剣がでてきた。それをレンダーースへ放った。

『愛の行方を』

レンダーース「うっっ・・・!!・・・くそっ!!」

レンダーースはログアウトして逃げていった・・・。

私は守る！！（後書き）

すみません、途中ですけど眠いんで寝ます！！（許してね）（

B Y 銀色の闇

解散！！

みづき「……ふう〜……よかった……みんな無事で」

熱斗「みづき、今は……？」

みづき「わからない……でも、なんか懐かしかった……」

炎山「懐かしい？」

みづき「うん……」

メイル「思い出せないの？」

光博士「いや、無理に思い出させない方がいい」

透「え？どうしてですか？」

光博士「人間の脳は、複雑にできているんだ……。だから、無理やり思い出させると、精神的に極めて危険なんだ」

名人「とゆうことで、みづきちゃん。ゆっくりと思い出した方がいい」

みづき「はい！」

元氣よく返事をしたみづき。

やいと「あっ！そうだ！ここにいるみんなが無人島に旅行しに行きましょう！」

メール「それ、いいわね！やいとちゃん」

炎山「おい！ちょっと待って、俺は仕事が……！」



光博士「いいじゃないか！なあ、炎山君！！」

炎山「えっ！？光博士！」

熱斗「いいじゃん、炎山！この前の合宿は、ライカと炎山無理  
だったけど……。なあ！炎山！！行こうぜ！！」

炎山「なっ！？」

ブルース「いいんではないでしょうか？炎山様。この頃、仕事づ  
めでしたし……」

炎山「ブルース……お前もか……！」

あきれ顔で云う炎山。

みづき「わあ〜！私、友達と一緒に旅行するの初めて〜！！」

炎山「……まあ……この状況で断るのも無理か……」

やいと「そうと決まったら、明後日の午前十時！科学省に集合  
！！もちろん、その他のみなさんも強制参加よ！！！」

光博士「じゃあ、やいとちゃん！ママも呼んでいいかな？」

やいと「ええ！どうぞ、おじさま！！！」

やいとは、そう言った後、思いつきり息を吸って……。

やいと「今日は解散！！！」

解散！！（後書き）

あれ？なんかやいと目立ってない！？  
それになんかキャラこんなだっけ！！？

不気味な影……

そんな、熱斗たちの楽しい日常の中……。ある薄暗く不気味な  
電脳空間では……。

レンダー「すみません・Dr・リーガル様……」

リーガル「……ほう……お前がてこずるとはなあ……」

レンダー「実は、後少しとゆつとところで……変な少女に邪魔  
されてしまいました」

リーガル「少女？」

レンダー「はい。こちらをご覧ください」

そう云って、レンダーは、みづきが移った画像を取り出した。

リーガル「こいつは・・・！！・・・フッフ、またこいつに出会えるとはなあ・・・」

レンダー「リーガル様！。じゃあ、やはりこいつは・・・！！」

リーガル「ああ・・・そうだ。八年前・・・お前たちの故郷を破壊した奴だ！！・・・フッフ、こいつは使える。フハハハハ！！！！」

レンダー「（ようやく見つけたぞ・・・悪魔め！！）」

怒りと憎しみに溢れた目をしたレンダー。

不気味な影たちが熱斗たちに近づいていた。けど、熱斗たちは、まだそのことを知らない・・・。

不気味な影……（後書き）

銀色の闇「今日サイトを開いたら真面目にビビりましたよ〜！熱  
斗くん〜」

熱斗「うお！また来た！！」

ロックマン「どうしてビビったの？」

銀色の闇「よくぞ聞いてくれました！ロックマン〜！いや、み  
なさんもお気づきのとおり、急に、にじファンってゆうつとこるに移  
動しててさあ！〜！自分の作品が消えた！？ってびっくりしちゃった  
」

熱斗「あ〜、そうか！お前しらなかったもんな」

ロックマン「でも、安心して！もう大丈夫だから」

銀色の闇「うん」

熱斗「さあ！次回は、みんなで誰もいない無人島でキャンプだ！」

ロックマン「もうっ！熱斗君、はしやぎすぎて怪我しないでよ！」

熱斗「わかってるって！！！」

銀色の闇「じゃあ、次回も・・・」

熱斗・ロックマン・銀色の闇「よろしくね〜！！！」

楽しい休日！？いざ！無人島へ！！

あつとゆうまに明後日になり・・・旅行当日。

やいと「さあ！みんなそろったわね！！」

はい！……！……。

みづき「あ、あの……やいとちゃん……」

少しオドオドするみづき。

やいと「何？みづきちゃん」

みづき「ありがとね。私だけじゃなく、レイアとラッシュユも……」

「・

やいと「ん～もう！遠慮なんてしないで！！！」



みづき」「うん うん」

やいと」「さあ！行きましょう」

.....

やいとの専用飛行機に乗り、みんな自分の席に座り、荷物を置く。

ちなみに席はこつだ。

燃次・やいと

テスラ・チャリー

炎山・メール

ディンゴ・ジャスミン

ゆり子・ミヤビ

熱斗・みづき

光博士・名人

デカオ・透

はる香・レイア・ラッシュ プライド・ライカ

ってな感じです。

燃次「隣よろしくなあ！嬢ちゃん」

やいと「こちらこそよろしく！」

テスラ「なんであなたと隣なのよ！！」

チャリー「そんなことゆうなよ、テスラ」

メイル「よろしくね、炎山君」

炎山「ああ・・・」

ジャスミン「よろしくネーディン」

ディンゴ「あぁー！よろしく」

ゆり子「よろしくね・・・ミヤビ」

ミヤビ「・・・よろしく・・・頼む・・・」

熱斗「よろしくな！みづき」

みづき「うんー！よろしく」

光博士「久しぶりの休日だな！名人」

名人「そうですね！光博士」

はる香「よろしくね」 レイアちゃん、ラッシュちゃん「！」

レイア「ワン！」

ラッシュ「ニャーン！」

こうして旅行は始まった。

「リラックス？ドキッドキのライカさん！」

．．．．ピンポンパンポン．．．シートベルトを外してくだ  
さい．．．。

熱斗「うん！．．．やっと動ける．．！」

メール「ねえ！みんなでババぬきしない？」

やいと「いいわね！やりましょう」

熱斗「俺たちもいい？」

メール「いいわよ！」

こうして、熱斗・メール・やいと・炎山・みづき・ディンゴ・ジ  
ヤスミン・デカオ・透・燃次たちは

ババぬきを始めた。

チャリー「なあ、テスラ。今度一緒にアメリッパに旅行しに行  
こう」

テスラ「いやよ！なんであんと・・・」

チャリーは、相変わらずテスラをナンパしていた。

ゆり子「・・・・・・・・・・」

ミヤビ「・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・。さあてお次の人は！

光博士「本当、久しぶりの休日だな〜！」

名人「そうですね〜！」

仕事づめから解放されて、すっかりリラックスしている光博士と名人。

はる香「レイアちゃん、ラッシュュちゃん ささみ食べる?」

レイア「ワーン!」

ラッシュュ「ニャー!ニャー!」

レイアとラッシュュは、席ちゃんとお座りしている。

はる香「まあ〜!レイアちゃんとラッシュュは、食いしん坊ね」

はる香は、もともと動物好きなので、とてもレイアたちをかわいがった。

プライド「とってもかわいい〜!」

プライドは、レイアの頭をなでた。

レイア「クウ〜ン！」

レイアは、とてもうれしいのか、シッポをふりふり振っていた。

ラッシュ「にゃ〜ん」

ラッシュは自分もなでもらいたいのかプライドの手にすりすりしてきた。

プライド「ウフフ！この子たちとても人なつこいのね」

ライカ「プライド王女は・・・動物が好きですか？」

隣に座っていたライカもプライドの隣に立ち、ラッシュの頭をなでた。

プライド「ええ！大好きよ！！ライカも？」



ライカ「はい」

プライド「あっ、そういえば！ライカと二人でエアーマンから逃げて、熱斗が助けに来てくれた日

犬がいましたよね！」

ライカ「モロゾフのことですか？」

プライド「はい！」

ライカ「……もしよろしければ、今度連れてきましょうか？」

プライド「いいんですか！」

ライカ「プライド王女がお望みなら……」

プライド「ありがとう！ライカ」

プライドはライカに飛びついた。

ライカ「！！プ、プライド王女！？／／／／／」

おもわず顔を赤めるライカ。

はる香「ふふふ・・・！二人共まだ若いわね」

二人の姿を見て、くすくす笑うはる香。

まだまだ終わらない旅行。

「リラックス？ドキッドキのライカさん！」（後書き）

今回は、恋愛入れてみました〜！！！！きゃ〜！！！！

少し臭かったかな？

変な癖??

デカオ「だあ〜！また負けた・・・！」

熱斗「アハハ！デカオ、お前弱すぎ！！」

透「デカオ君、もう三回連続負けてるよ！」

メイル「本当デカオ君ってこの手のゲーム弱いわよね〜！」

デカオ「今度こそ俺が一番になってやる！！」

炎山「その言葉さっきから聞いているぞ」

デカオ「くう〜！！！！」

燃次「ハハハ、云われちまったな！坊主！！」

プツ・・・アハハハ！！・・・。

熱斗「あゝ、なんか腹減ってきたな・・・」

みづき「それなら私が作ったクッキーあるけど食べる？」

熱斗「おっ！食べる！食べる！！！」

目がキラキラ光る熱斗。

みづき「はい、どうぞ」

みづきは、自分のバックから包みに入ったクッキーを取り出して、熱斗に渡した。

熱斗「いただきます〜！」

熱斗は包みからクッキーを取り出し、食べた。

熱斗「！！・・・うっうめ〜！！！」

みづき「よかった！口に合って・・・。あつ、そうだ！！実は、いっぱい色々なお菓子作って来ちゃったからみんなも食べる？」

やいと「何があるの？」

みづき「う〜んっとね・・・確か・・・ガトーショコラにプリンにチーズケーキ、ドーナツ、マドレーヌに生キャラメル、ミルククレープ、トリュフに・・・ブツブツ・・・（中略）・・・」

透「ええ！！そんなに作ったの!？」

熱斗「すっっ！！！」

メール「わざわざ作ったの？」

みづき「ううん、私の変な癖のせいだわ……」

デインゴ「変な癖？なんだそりゃ??」

みづき「私、ぼーっとしていると、勝手に手が動いちゃって……  
気がついたら、なぜかいつもお菓子いっぱいあるの」

ジャスミン「そ、それはすごいネ……」

みづき「毎回、後始末が大変なのよ〜！」

メール「……じゃ私がガトーシヨコラもらっていい?」

みづき「手伝ってくれるの!」

メイル「ええ！私にまかせて！！」

みづき「友達！！！！」

みづきは、メイルの手をガシリと取って握手する。

やいと「私はプリン！」

透「じゃ、僕はチーズケーキ」

デカオ「俺は、ドーナツ！」

燃次「俺には、マドレーヌ」

デインゴ「んじゃ、俺は生キャラメル」

ジャスミン「私は、ミルククレープをお願いするネ！」



みづき「ありがとう！みんな」

みづきは、頼まれたお菓子を次々に渡していく。

みづき「……？……あれ炎山はいいの？」

炎山「俺は、甘いのは苦手だからいい」

みづき「甘いのは苦手……？じゃあ、それなら……」

みづきは、ごくごくそとバックからさぐり始めた。

炎山「……？……何をして……ムゲツ！？」

みづきが炎山の口の中に何を入れた。

炎山「いきなり何をひゆる……ん……？」

もぐもぐ・・・ゴクン・・・。

炎山「・・・おいしい・・・」

みづき「それはよかった!じゃ炎山はこれね!」

みづきはさっき炎山の口の中に入れた物を炎山に渡した。

炎山「・・・トリユフ・・・?」

みづき「うん。間違ってブラックチョコレートで作っちゃった奴」

炎山「まったく・・・!。勝手に人の口に物を入れるなあ」

みづき「えへへへ、ごめん、ごめん！」

光博士「おーい！みづきちゃん、私たちにもお菓子をくれな  
いかな？」

みづき「あっ！はい、今行きますー！！！」

さっさと、みづきは、光博士たちのところに行ってしまった。

炎山「・・・さわがしい奴だな・・・」

っと云いつつ、みづきからもらったお菓子を食べる炎山であった。



それっていいの？

みづき「ねえ、メールちゃん」

メール「ん？何、みづきちゃん」

お菓子を配りおえたみづきは、メールと話をしていた。

みづき「メールちゃんっていつも何してるの？」

メール「えっ！・・・んん・・・ピアノの練習をしたり、家の手  
伝いしたり・・・塾に行ったり、熱斗たちとよく遊んだりしてるか  
な！」

みづき「へー！」

メール「みづきちゃんじゃあいつも何してるの?」

みづき「えっ」と・・・私は自分の家の家事やお菓子作り、レイアとラッシュと遊んだり、後は薬の実験したりしてるよ」

メール「へ〜!家事や遊んだり、お菓子作ったり、実験してるんだ〜・・・えっ?・・・ちよと待って!実験って何!?!」

みづきの遅い・・・。

みづき「え?・・・あ〜、私色々な薬とかを作ったりしてそれをよく売ってるんだ〜!」

メール「そっ・・・それっていいの?・・・」

みづき「大丈夫、大丈夫　ちゃんと警察が来たらダッシュで逃

げてるから!」

メール「ア、アハハハ・・・」

もう苦笑いするしかないメールであった。

・・・ピンポンパンポン・・・まもなく目的地に到着するので、みなさまシートベルトをおつけください・・・

みづき「あっ、もうつくって」

メール「うん、座らなくちゃ・・・!」

みんな席に座り、到着の準備をした。

それっていいの？（後書き）

さあ〜！おつかいしましたよ〜・・・熱斗たち  
！



到着！！

熱斗「ん〜！」

飛行機の中から出て、思いっきり背伸びをする熱斗。

熱斗「ここがやいとちゃん家の無人島か〜・・・やっぱりす  
いなあ、ロックマン」

ロックマン「そうだね」

白い砂浜に透き通るぐらいきれいな青い海、そして大自然の森。  
まるで、ジャングルみたいだ・・・。

メイル「うわあ〜！海きれい〜！！」

透「こっちの森もすごいよ！」

やいと「さあ、こっちが女子であっちが男子よ！」

やいとが指したのは、二つのキャンプサイト。さすが綾小路家、普通のキャンプサイトより二倍ぐらい大きい。ちなみに、右が男子で左が女子だ。

みんなは、さっそく中に入り、荷物を置き、着替えた。

熱斗「よし！泳ぐぞー！！！」

メール「あっ、待ってよ熱斗〜！！」

熱斗やメールや他のみなさんも海へ泳ぎにいった。

光博士「さあ、ほら炎山君も泳ぎにいつておいで」

炎山「はい、ありがとうございます・・・」

熱斗「おい！・・・炎山」

炎山「？・・・なんだ、熱・・・」

炎山が振り向いた瞬間だった。

バシヤ！！

熱斗に水を思いつきりかけられた炎山。

熱斗「ブツ・・・ハハハハハ！！！！」

炎山「・・・・・・・・。。熱斗・・・・・・・・！上等だ！！あのガキ！！」

炎山も海の中に入り、逃げる熱斗を追いかける。

はる香「やっぱり、まだ炎山君も子供ね」

光博士「アハハハ！そうだね、ママ」

その様子を遠くから見守るはる香と光博士。

.....

みづき「これが海か！初めて見たね！！レイア、ラッシュ」

レイア「ワン！ワン！」

レイアは先に海に入り、泳いだ。

みづき「あっ！待ってよ、レイア。ラッシュは、私につかま  
っててね！」

ラッシュ「にゃーん！」

みづきはラッシュを抱きかかえて、海に入っていった。

みづき「うわぁ〜！！気持ちいい〜！！」

ラッシュ「んにゃー！！」

しばらく泳ぎ、みづきはある異変に気がついた。

みづき「……ん?……」

草木や鳥たちが騒がしいのだ。近くにいた小鳥がみづきの方に寄ってきた。

みづき「え?何……なっ!?!……あ、ありがとう小鳥さん!!。レイア、ラッシュ行くよ!」

みづきたちは急いで海から出て、キャンプサイトに向かった。

熱斗「あっ!ヤベッ……!バスタオルキャンプサイトに忘れてきた!!」

デカオ「何やってんだよ、熱斗」

熱斗「ごめん、俺取ってくるわ！」

熱斗はバスタオルを取るためにキャンプサイトに戻った。

キャンプサイトのできごと！

キャンプサイトには、お留守番をしているナビたちがいた。

ロックマン「いくよ！ロールちゃん」

ロール「いいわよ！ロックマン」

ロックマンとロールとガッツマン、トマホークマン、グライドはビーチバレーをやって遊んでいた。

ロックマン「ブルースも一緒にやろうよ！！」

ブルース「俺はいい・・・」

ロックマンはブルースが近くにいたので誘ったがあっさりと断られてしまった。



「トマホークマン」何やってんだよ、ロックマン!!早くしろよ  
」!

ロックマン「あっ、ごめん。いくよ、えい!!」

ロックマンの投げたボールは変な方向にいき、ブルースの顔に直撃した。

ブルース「~~~~っ!!」

ブルースは、手で顔を押さえた。

ロックマン「.....プツ.....!!」

その様子がおかしかったのかロックマンはついつい笑ってしまっ  
た。

ブルース「.....ロックマン.....貴様.....!!」

ロックマンをギロリと睨むブルース。

ロックマン「あっ……(ヤ、ヤバい!)」っ……「めんなさい  
」!……!」

ブルース「待って!ロックマン!」

逃げるロックマンを追いかけるブルース。

ロックマン「本当にごめんって……うわぁ!」

急にPETが動いて尻もちをつくロックマン。

ロックマン「いってっ……。もう!熱斗君、急にPET動か  
さないでよ!」

ロックマンは、モニターを出して外の様子を見た。

ロックマン「熱斗君！ちゃんと聞いて・・・うわぁぁー!?!」

モニターを見てビクビクするロックマン。

ロックマン「サ・・・サル・・・!?!」

そう、ロックマンが見たのは、野生のサルの顔だった。

サルA「ウキー！ウキッー!?!」

サルB「キキー!?!」

なんとサルは二匹おり、サルBは袋を持っていて、その中に入れられた。

ロックマン「うわぁぁー!?!」

ロール「きゃー!?!」

ガッツマン「ガスー！」

グライド「わぁー!？」

その次にもナビの悲鳴が聞こえた。

サルB「ウキキー!！」

どうやらPETをすべて袋に入れたと云っているらしい。サルAとサルBは袋を持ってキャンプサイトから出ていこうとした時だった。

みづき「「らぁ・・・!ちょっと待った!！」

ドアをバンツと開けて入ってきたみづき。

みづき「私のPETとみんなのPETを返さない!！」

サルA「ウキツ!？」

なぜわかった!?!と云う顔しているサルA。

みづき「この木や小鳥さんたちが教えてくれたのよ!さあ!  
!返して!」

サルA「ウキツ・・・!キツキー!」

サルB「ウキツ!」

サルAとサルBは、窓から外へ出た。

みづき「あっ!待ちなさい!」

あわてて追いかけるみづき。

熱斗「何やってんだ?みづき・・・」

キャンプサイトから走り去るみづきを見た熱斗。

熱斗「追ってみるか!」



見事にサルAの頭にゴチン　！っと音をたててぶつかったヤシの実。

みづき「ヤシの木さん、もう一つお願いします！！」

ヤシの木はもう一つ実を落とした。今度は、ヤシの実を手で持ち、ギロリツとみづきの目が光り、サルBを見てヤシの実を投げた。

みづき「PETを・・・さっさと返せって云ってんだろぅがー  
！...！」

思いつきりサルBの頭に当たった。

サルB「ウギヤ！！」

・・・ご愁傷様・・・。

みづき「よっしやー！...！」

手を上に上げて喜ぶみづき。

みづき「……って！しまった何を喜んでるんだ私は！！」

はっ、と我に返った。

みづき「サルさんたち！大丈夫ー！？」

さっきの行動と言葉が嘘のようだ……。



キャンパスサイトのできごと！（後書き）

昔のみづきには、まだまだ秘密があります。まっ、その話は違つとぎごと！…！

## 大切な物

みづきは、サルたちを念のため縄でぐるぐる巻きに縛った。

みづき「ふう……あっ！PET!!」

すっかり忘れてたみづき。

ロックマン「みづきちゃん……ここだよ……！」

草むらの中で声がした。急いでその声を頼りにして探した。

ガサ……ガサガサッ！……ガサ……!!。

みづき「どい？……うん……あ、あった!!」

パツと表情が明るくなったみづき。袋を開けてPETを確認した。

みづき「よかった〜！みんなのPET、無事だ〜！それに私のPETも」

ロックマン「・・・助かった〜・・・」

ロール「本当によかった！」

アイスマン「め、目が回ったです〜！」

みづき「さあ！キャンプサイトに戻ろうっか」

ロックマン「みづきちゃん！後ろ〜！」

みづき「え?・・・うわあ!!!」

立ち上がった瞬間に後ろから突然何かのしかかった。

ブルース「大丈夫か!?!」

みづき「いつくた〜!!今度は何よ・・・!!・・・あれ?・・・ない!?!」

ロックマン「無いつて何が??」

みづきのPETもあるし、みんなのPETもある。一体何がない  
というのだらう??

みづき「・・・ネックレスが・・・ない・・・!!」

ロックマン「ネックレス?」

( ( そういえば、みづきちゃん。いつも鍵の形のチャームが付いたネックレス付けてたような？ ) )

ロックマン「大切な物なの？」

みづき「大切な物って・・・あれは・・・！」

みづきが何かゆうおうとした時だった、メデイの声が遮った。

メデイ「ロックマン！あれ！！！」

メデイは、ある一つの木を指した。

サルC「ウキヤキヤ！」

みづき「えっ！！！」

みづきは、サルたちの方を見たが、二匹共まだ気絶して、ぐるぐる巻きに縛られている。

みづき「もしかして、もう一匹いたの!？」

ナパームマン「お、おい!あれじゃねのか!！」

サルCの手には、金色に輝く鍵のチャームが付いたネックレスがあった。

サルC「ウキーツ!」

サルCは海の方に向かって逃げていた。

みづき「あっ!待って!！」

急いで追いかけてようとした時、聞き覚えがある声が後ろからした。

熱斗「おーい!！」

みづき「熱斗!?!どうしてここに!」

熱斗「お前が走ってくのが見えて・・・」

みづき「ごめん!熱斗、今それどころじゃなかった!あつ、みんなのPETと私のPETよろしく!」

熱斗「え?ちよっ・・・!おい、みづき!?!」

熱斗の声など聞かず、みづきはサルCを追いかけにいつてしまっ  
た・・・。

熱斗「なっ・・・なんなんだよ・・・!」

ロックマン「熱斗君!!熱斗!!」

地面に自分のPETが落ちていた。よく周りを見ると自分のだけ  
じゃなく、みんなのPETも落ちていた。

熱斗「ロックマン！なんでこんなところに・・・」

ロックマン「そんなことより大変なんだよ！熱斗君！！実は・

「・

・・・

みづき「はあ・・・はあ・・・！！・・・ま、待って～！！」

みづきは、またもサルを追いかけていた。まるでサルゲッツェみたい・・・。

(きささ) さすがに・・・疲れてきた・・・！！)

サルC「キャキャ！！」

サルCはピタリと止まり、まるでみづきをからかうかのようだった。



お尻ペンペンやあつかんべをしてきたりした。

みづき「……うっ！！」

悔しいが、結構高い木の上にいるので、見るこじかできないみづき。

サルC「ウキー！」

サルCは、まるで悔しかったらここまでおいで〜！と云ってるかのようにみづきをからかった。

みづき「……」

ブチッ！……。みづきの方から嫌な音がした。そして徐々に体から怒りのオーラが流れるほどまでに！

みづき「このクソザルが……！！！」

どこから持ってきたのかわからないが、五メートルぐらいあり、重さは、五十キロも在りそうな重たそうな巨大な岩を持ち上げている。

みづき「おりゃー!?!」

みづきはサルCに目がけてそれを投げた。

サルC「ウツギヤ!・・・キーー!?!」

サルCは、岩を何とか避けたが、木から足を滑らせて木から落ちてしまった。

みづき「あ、危ない!?!」

慌てて、サルCをキャッチしたみづき。

みづき「ぶっ・・・てっあれ!?!」

気絶しているサルコの手には、さっきまであったネックレスがないのだ。

ヒュー……。ポヤンッ!……。。

何かが海に落ちる音がした。それはまさに、みづきのネックレスが海に落ちた音だった。

みづき「うっ、嘘!やだ!」

海に飛び込み、ネックレスを必死で探すみづき。

熱斗「みづき!」

熱斗が森の中から出てきた。

みづき「熱斗……」

熱斗「一端戻ろう、パパたちにこのことゆわないと・・・」

みづき「い、いや！そんなことしてたら、ネックレスがどっかいつちやう！！」

熱斗「でも！」

みづき「お願い！熱斗！！あのネックレスは私にとって大切な物のの」

熱斗「・・・」

必死に海の中を探すみづき。目に前にキラリと何かが光った。

みづき「あつた！！」

みづきが手を伸ばし、ネックレスを掴んだ瞬間だった、熱斗が同時に叫んだ。

熱斗「ダメだ！みづき！！そっちはやいとちゃんか深いから入るなって・・・！」

みづき「え？・・・！！！」

急に足の置き場が深くなり、バランスがとれなくなり泳げない。

276

みづき「ブクブク・・・ぷはっ！・・・たったす・・・ブクブク・・・  
ぶはっ！！！」

熱斗「ヤ、ヤバい！！！」

大切な物（後書き）

復活ー！！！！久しぶりに投稿しましたぜ

でも、なんかいいところで終わっちゃいましたねー！！

ピンチ！どうする！？絶体絶命の危機ー！！

みづき「ブクブク・・・ぷはっ！・・・たっ たす・・・ブクブク・・・  
ぷはっー！！」

熱斗「ヤ、ヤバい！！」

みづき「うっ・・・ブクブク・・・」

熱斗「しっ、しっ かりしろー！！」

みづき「も、もう・・・ダメ・・・！！・・・」

バシャア！バシャア！！バシャ・・・！！・・・。。。

熱斗「お、おいー！返事をしてくれー！みづきー！！」

.....

ゴポゴポ.....。

(ヤバ...い...意識が.....)

.....

気づけば小さい女の子がいた。三歳ぐらいの女の子。何やら機械に...いや今はもう使われてない昔のPETに話しかけていた。その中には銀色の髪に赤い瞳をした少女型のナビがいた。



「????」クレン! きょうもお歌、うたってくれる?」

クレン「はい、みづき様が望むなら……」

みづき「もう、クレン! ! さまじやなくてちゃんで呼んで!」

クレン「あっ……はい。みづきちゃんが望むなら」

みづき「うん、おねがい!」

クレン「では、いきますよ……ボイス・メロディ発動……」

クレンの耳に付いている真っ白いヘッドホンが優しいオレンジ色の光を放った。

く君と僕く

『夢の中でだけで逢えれば』

『僕はそれだけで幸せなのに』

『君は僕のそばで』

『微笑んで手を差し伸べてくれた』

『いつも冴えない顔をしていた』

『そんな毎日だった』

『遠くから君を眺める』

『そんな毎日だった』

『君の事を考えると』

『幸せな気分になれる』

『ただそれだけでいいのに』

『違う毎日が僕を迎えてくれた』

『夢の中でだけで逢えれば』

『僕はそれだけで幸せなのに』

『君は僕のそばで』

『微笑んで手を差し伸べてくれた』

『君の夢を見ていると』

『幸せな気分になれる』

『ただそれだけでいいのに』

『目を覚ませば』

『君は優しく包んでくれる』

『夢の中でだけで逢えれば』

『僕はそれだけで幸せなのに』

『君は僕のそばで』

『微笑んで手を差し伸べてくれた』

『夢の中でだけじゃ物足りない』

『君の笑った顔そばで見たいよ』

『手と手繋ぎどどこまでも』

『君と僕一緒に歩んで行こう』

『君と僕一緒に歩んで行こう』

『永遠に…』

みづき「……………やっぱり、クレンのお歌大好き!!」

クレン「ありがとうっ!!」

そのナビはニッコリと笑った。

.....

( ) ..... そうか ..... やっぱり、あなたの能力だったのね .....  
クレン ..... ( )

コポコポ ..... 。 みづきは失いかけてた目の光りをもう一度輝かせた。

( ) ..... そうだ ..... 私はまだ死ぬわけにはいかないんだっ ..... あっ ..... ( )

熱斗は陸の上で戸惑っていた。

熱斗「やっぱり俺がー！」

ロックマン「ダメだよ！それじゃあ熱斗君も溺れちゃうよー！」

熱斗「うっ……でもそれじゃあ……！……？……なんだあれ……」

海の方にコポコポと泡がたっている。

熱斗「み、みづ……！……！」

ザッパーンー……！！……！！……！！  
熱斗たちの目の前から水しぶきが  
上がった。

そして、それはなんとイルカに乗ったみづきの姿だった。

みづき「神様は私を見捨てていなかったー!!」

それにちゃんとみづきの左手には、ネックレスがあった。

熱斗「……………」

それを見てポカーンと唾然している熱斗だった。

熱斗&ロックマン（ええええええええっ!!!!）



ピンチ！どうする！？絶体絶命の危機ー！！（後書き）

そんな展開ありかよ！！ってところで終わってしまったダメな私・  
。

ついでにこの歌は鏡音レンが歌った曲です。よかったら、この小説を見ながら聞いてくれたら楽しめるかも！

さみじそ・・・(前書き)

おまたせしました!!

さみしゅ・・・

とにかくその後、PETを無事取り戻し、私たちはみんなにあつたことを報告した。

はる香「まあ、そんなことがあったの・・・」

光博士「二人共、大丈夫だったのか？」

熱斗「うん、まあどうにか！」

炎山「それにしても熱斗・・・」

炎山が目線を向けたのは、ぐるぐる巻きに縛られた三匹のサルの姿。

炎山「これ・・・どうするつもりなんだ？」

ライカ「同感だな」

みづき「ちょっとお話しれば何かわかるかも」

みづきは、三匹のサルの前にしゃがみ込んだ。

みづき「ねえ、なんでこんなことしたの？」

やさしく聞いたが、サルたちはみんなそっぽを向いた。

みづき「……………」

無言でみづきは、何故か目の前らへんにあるさつき投げた(?)  
巨大な岩のところに行き、手をグウにして岩を思いつきり殴った。

バキ……ピキ！バキツバキバキ！！……バアツキーン！！！！  
……………。

岩に突如亀裂が入り、見事岩が真っ二つに！！

熱斗たち「……………(ん！！！？?)」

みんな無言のままどんどん顔が青ざめ、じんじょうじやないほどの冷や汗をかいていた者もいた。

みづき「云ってくれるよね?」

振り返ってニッコリと笑ったみづきだが、目が笑っていないように見える・・・気のせいか?」

・・・・・・・・・・・・・・・・

みづき「・・・ふん・・・そうゆうことだったんだ・・・」

熱斗「翻訳頼むよ」

みづき「うん。このサルたちは、ただ遊んで欲しかっただけだったんだって」

メール「え?どうゆうこと・・・?」

みづき「寂しかったんだって・・・。ここって無人島でしょう? この島には、あんまり野生動物もないし、人も全然来ない。そんなところに私たちが来て、かまってもらいたくってやったんだよ」

透「そうだったんだ・・・」

みづき「でもね、人の物は取っちゃいけないの。わかるよね？」

三匹のサルは、コックリとうなずいた。

プライド「じゃあ、みづき・・・もう・・・」

みづき「うん！もうこれはいらないね・・・」

みづきは、サルたちを縛っていた縄をほどいてあげた。

「！  
デインゴ」だったら、俺たちが遊んでやるぜ！なあ！みんな！  
「！

熱斗たち「ああ！」 「ええ！」

熱斗たちもそれにならずいた。。

熱斗「じゃあ、気を取り直して遊ぼうぜ!!」

みんな「おおおお!!」

.....

そして、すっかり夜になり、寝る時間となった.....。

みづき「……眠れないなあ」

( ) あの時……私が海で溺れた時に見たあれ……やっぱり……  
( )

みづきは、一緒に寝てるみんなを起こさないようにそっとキャン  
プサイトから出た。



さみじさ・・・(後書き)

今日ようやく中間テスト終わったよ!!

みなさんお待たせしました！

これからもよろしく~~~~~ !!!!!!!!

月明かりの下で……

ザブン・ザザ・ザブン！……。

静かに波の音が響いた。

みづき「今日は、綺麗な月……」

空には無数の星とその場を照らす美しい満月。

みづき「……」

スウと目をつぶり、みづきは白いヘッドホンみたいなのを出した。

〜月歌〜

『乾いた頬の跡に』

『注ぐ月の明かりで』

『くすんだ心さえ透かす』

『辿るこの静寂が』

『続けばいいのにと願う』

『想う事はまだ溢れても』

『傷付くだけの言葉は』

『闇の中に溶かして』

『月が僕らの記憶を照らし出す』

『戻ることはない過ぎた日々を』

『手を伸ばせば届く』

『幻さえ見せる』

『魔性の蒼い光』

『深く欠けた心に』

『満ちた月の明かりで』

『なくした所だけ埋める』

『揺れては触れる僕らの手は』

『二度と戻らない』

『月が僕らに見せた淡い夢は』

『叶う事もなくただ覚めて』

『手を伸ばせば消える』

『幻さえ見せる』

『魔性の蒼い光』

『月が僕らの記憶を照らし出す』

『戻ることはない過ぎた日々を』

『手を伸ばせば届く』

『幻さえ見せる』

『 魔性の輝きを放つ 』

『 月が僕らに見せた淡い夢は 』

『 叶う事もなくただ覚めて 』

『 手を伸ばせば消える 』

『 幻さえ見せる 』

『 魔性の蒼い光 』

.....

ガサツガサ・・・！・・・。

みづき「だ、だれ・・・！？」

ビクリと体を震わせ、裏返ったような声で云ったみづき。

メール「あっ！ごめん、私よ！みづきちゃん」



やいと「後、私とジャスミンもね！」

ジャスミン「こんなところで何してるネ？」

女の子二人が草むらから出てきた。どうやら、みづきがいなくなっていることに気づき、わざわざ探しに来てくれたらしい。

月明かりの下で……（後書き）

次は、女の子でのお話に〜！

何となく、おまけ！！（みづきが何を悩んでいるか推理している〜  
人〜）

メール「みづきちゃん何悩んでるんだろっ?」

やいと「まさか、彼氏ができないって悩んでるじゃ……?!」

メール「いやいや、それはないって!」

なんなんだこの短さは!!!そしてこの話!!!?

書いた自分でも、わからなくなってきたぞ!!!???

ただの昔話

ザブン・・・ザブンッ・・・。

女子四人は、ちょうどそこにあっただ丸太の上に座った。

こんな風。

やいと・みづき・メイル・ジャスミン

やいと「ふっ・・・ねえ、みづきちちゃん何か悩んでるでしょ？」

みづき「えっ!?!?」

やっぱり凶星ね〜・・・っとやいとがつぶやいた。こんな時に勘のいいやいとが恨めしい。

メール「みづきちゃん、私たち何かできない？話とか聞くよ？話すと楽になることもあるでしょ」

みづき「うん・・・」

とても弱い声だった・・・。みづきの顔はさっきから少し俯いていた。後、辺りが暗いせいか余計みづきの顔が見えない。

ジャスミン「ミヅキ・・・。さっき歌ってた歌、とても綺麗だったけど・・・なんか悲しかったネ」

みづき「え・・・？そうだった・・・？」

ジャスミンの方に少し顔を向けたみづき。

やいと」「うん、そう言えば私も感じた・・・」

メール「これじゃあ遠からず熱斗たちも気づくかもね？」

メールは少し意地悪そうな声で言った。その言葉を聞いてみづきは、うっ・・・と言葉が詰まった。

みづき「わかったよ、じゃあ今は、メールちゃんたちにだけに話すね」

メール・やいと・ジャスミン 「」「うん!!!」「」「」

メールたちは少しみづきに頼ってもらって嬉しいのかニッコリと笑った。

みづき「実は、ある夢を見てね・・・」

ジャスミン「ある夢？」

みづき「そう、私がまだ小さかった時の……。まだ私のPETにクレンがいた時……。ほんとなんであんな夢見たんだろう」

やいと「クレンって……？」

みづき「まだみんなに言っていなかったね、クレンは、私のナビの名前。一番……。大好きだった友達の名前……」

クレン「……。みづきの両親が亡くなった時、一緒に行方不明になってしまったみづきの大切なナビの名前……。あまりにもかわいそうで不幸な出来事とこの話を聞いた者は思うだろう。

メール「あつ……」

メイルたちは、そこで何も言えなくなってしまった。ただただなんて自分たちはバカなのであるうっとうしく心の中で思った。その場で落ち込む三人。

みづき「いいよ、みんな・・・そんなに落ち込まないで・・・  
ただの昔話なんだから・・・」

力なく呟いた最後の言葉・・・やはり、みづきは今でもクレンのことを忘れられないのだ。だから、みづきはこの町に来たのだ。レイアとラツシユも一緒だが、それでもみづきは普通の女の子なのだ。友達とお話したり、どこかに行ったり・・・でも、みづきはきつとそんなことは、やっていないだろう。たった一人でここまで来たのだ、それがどんなに大変で心細かっただろう・・・？

メイル「・・・よしっ・・・私決めたわ!!」

みづき「は、はい!？」

みづきは、何を決めたんだ?とゆう顔でメイルを見た。

メール「私もみづきちゃんのナビ……いいえ、クレンを探すの手伝うわ!」

やいと「やっぱりね!メールちゃんなら言つと思つたわ」

ジャスミン「じゃあ、私たちも!」

やいと「ええ!!やりましょう」

みづき「えっ?はあ……?ちょ……!?!いいよ、私だって探すのに数年ぐらいかかってるし、見つかるって保証もないし、後私の問題だし……」

メール「みづきちゃん!」



みづき「は、はい!?!?!」

いつもより、強気のメイルたちに圧倒されて思わず変な声で返事をしてしまったみづき。

メイル「1がだめなら2!」

やいと「2がだめなら3!」

ジャスミン「3がだめなら4!」

みづき「.....?.....」

いきなり意味がわからないことを言われたのでちょっと返事に困

ったみづき。

メール「友達は・・・仲間は、いつだって仲間を見捨てないわ！」

やいと「私たちもう仲間でしょー！」

みづき「あっ・・・」

よつやくさつきの言葉の意味に気づいたみづき。

みづき「私でも・・・いいのかな？」

ジャスミン「うん！もうみづきは私たちの仲間ネー！」

みづき「・・・あ、ありがとう・・・！！／／／／／／」

少し顔を赤くしたみづき。

（まさか・・・思っても見なかった・・・私を仲間と呼んでくれる人たちがいるなんて・・・）

もう大丈夫・・・。うん、きっと・・・この人たちとなら・・・！。

ザブン・・・ザブン・・・！・・・ザザ・・・。

もうすぐ夜の時間は終わる・・・。。。

ただの昔話（後書き）

さあ！次回で多分無人島のお話が終わると思います！

またね！

ついに、キャンプ最終日。

やいと「片づけみんな終わった？」

メイル「うん、大丈夫よ」

やいと「うんじゃもう飛行機に乗るだけね」

次々と熱斗たちは、荷物を運び飛行機の中へ入っていた。でも、みづきだけがまだ飛行機の外でお別れをしていた。

みづき「サルさんたち、これからも元気でね」

サルA・B・C「……キ……」

みづき「そんな悲しそうな顔しないでよ……。きっとまた会えるよ」

みづきは、動物の言葉がわかるせいでもサルたちとお別れし  
じゆう。

やいと「みづきちゃん！もう出発するわよ……！」

自家用飛行機の窓でやいとがみづきを呼んだ。

みづき「————…。またね！サルさんたち！」

ニツコリと笑って、みづきは飛行機に乗った。キラリと光る涙に誰にも気づかれないように…。





狙われた少女（前書き）

お待たせしました、みなさん^^^！

## 狙われた少女

無人島キャンプが終わってから数日後……。熱斗たちは、いつもの日常に戻っていた。でも、こんな日常も長く続かなかつた……。事件は、熱斗たちの通う小学校から始まった。

熱斗「ちえく……。また学校か……」

ロックマン「いつものことですよ、熱斗君」

ロックマン、久々の登場！

熱斗「うへ……」

とまだ熱斗は何か言いたそうだったけど、そんな時ガラリとドアを開け入ってきた女子三人。

みづき「おはよう、熱斗」

熱斗「おはよ〜」

机に顔をつけながら挨拶する熱斗。

みづき「どうしたの？」

やいよ」「安心して、らじものじやよー」

っと自分のリュックを置きながらニムつやいと。

メール「どうせ、学校がいや」とか言ってるんでしょ？」

メールは、熱斗を軽く諭した。

みづき「ふん」

まりこ先生「はい！朝の会始めるわよー！...」

まりこ先生が教室の中に入り、その後ろに見知らぬ男性がついてきた。赤いの髪に琥珀色の瞳。顔は少し無愛想な顔つきだった。歳は二十ぐらいだろう……。

まりこ先生「みんなに紹介するわね！今日からこのクラスの副担任になった上条ヒロヤ先生です」

上条「よろしく……」

上条は、素っ気なくみんなに挨拶をした。

みづき「？」

みづき（あれ？あの人・・・どこかで見たような？気のせいかな？？）  
（

上条は後ろの方に行こうとした時、偶然みづきと目が合った。

ギロリ・・・。

みづき「・・・！？」

みづき（い、いま私睨まれた・・・！？）

熱斗「どっしたんだ？みづき」

みづき「えっ、あっ、いや、なんでもないよ」

みづき（そっか・・・私の気のせいよ・・・気のせい・・・）

）

狙われた少女（後書き）

受験にいそがしく、しばらく書けませんでした・・・！



副担任の正体！

上条（くそっ・・・！なんでこんな面倒なことを俺にまかせるんだ・・・！！）

時をさかのぼり、ある奥深くの電脳空間のできごとが今回ののはじまりだった・・・。

リーガル「レンダース・・・お前に大事な任務を与える・・・」

レンダー「はっ！・・・で、その任務の内容とは？」

リーガル「夢野美月を捕獲し、ここに連れてこい」

レンダー「なっ！？リーガル様！！？」

レンダーは眉にしわをよせた。

リーガル「いいか・・・？これは命令だ、レンダー」

レンダー「・・・っ！・・・。わかりました・・・」

.....

上条「まさか、この俺があの悪魔を捕まえるはめになるとはな

」

辺りが薄暗いせいか、上条の目から凶暴そうな光が放たれている

ように見える。

上条「俺が絶対、仇をとるんだ・・！。亡くなった母さんや父さんのため・・アイツらのためにも絶対に！！！」

上条は謎の言葉をその場に残し近くにあった端末に手を置き、吸い込まれるように消えていった。

電撃パニック！

3時間目終了のチャイムが学校に響いた。

熱斗「あゝ！終わった！！」

メイル「まだ3時間目が終わっただけよ」

熱斗「ムツ……。そんなこと言わないでくれよ、せっかく人がくつろいでるのに……」

みづき「あははは……」

隣の席に座っているみづきは苦笑する。丁度、その時だった。教室にある電灯がチカチカ光ったり、消えたりし始めた。

デカオ「な、なんだ？」

デカオが電灯の近くにより、覗こうとしたその時、突如電灯から火花が飛び始めた。

メイル「デカオ君、危ない!!」

デカオ「うわぁ!?!」

デカオはメイルの声でとっさに火花を避けた。

シューゥ……………。

電灯の真下にあつた机が黒く焦げ、嫌な臭いを放っていた。メイルの声がなければ確実にやられていただろう。

ロツクマン「熱斗君！僕をあの電灯にプラグインして！」

熱斗「わかった！プラグイン、ロックマンEXE・トラスミツ  
ション！」

赤い赤外線のような光が電灯の端末に繋がった。

.....

ロックマン「電灯のコアはどこだ・・・？」

ロックマンは電脳空間を進み、ついに電灯のコアの場所へたどり  
ついた。

レンダース「よっ、思ったより速かったな・・・ロックマン」

ロックマン「!!」

ロックマンは背後から声がしてとっさに振り返り、ロックバスターをかまえた。

ロックマン「お前は・・・レンダース! そうか、これはお前の仕事だな!」

レンダース「別にそんな怒ることないだろ? あれはただの挨拶代わりにだ」

熱斗「挨拶だって・・・!!」

PETをとうしてロックマンとレンダースのやり取りを聞いていた熱斗。



レンダー「今日俺がやって来た理由は、ただ一つ・・・」

電腦空間にいたレンダーの姿が消え、突然現実世界の熱斗達がいる教室の中に眩しく光輝く光球が現れ、レンダーがゆっくりとその身を現実世界に現した。そして、一番近くにいたみづきの手を掴んだ。

みづき「きあっ!」

みづきは、レンダーに強く手を握られ痛みで顔を歪ませた。

レンダー「こいつをリーガル様の元へ連れて行く!」

熱斗「みじか・・・！」

## 少女の怒り

みづき「いや！離してよ！！」

みづきは力いっぱい手を振りまわし、振り払おうとしたがレンダー  
ーの手はまったくビクともしなかった。

レンダー「無駄だ。お前の自慢の怪力も俺には通じない、だ  
っってお前は俺と同じなんだからな！」

みづき「それってどうゆう・・・！」

熱斗「みづきを離せえー！！」

熱斗は近くにあつた椅子を持ち上げ、レンダーの体に思いつき  
り叩きつけたが、レンダーは何ごとくも無かったように平然とした  
表情で熱斗を見た。

レンダー「邪魔だ！」

レンダーは腕を振り上げ熱斗を壁へと叩きつけた。その衝撃で熱斗のPETがレンダーの足下に落ちた。レンダーはPETを拾いあげた。

レンダー「確か・・・これがなきゃクロスヒュージョンできねーんだよな？」

レンダーは勝ち誇ったような笑みを浮かべ、床に倒れている熱斗の頭を踏みつけた。

熱斗「うぐっ!!」

デカオ「熱斗！」

みづき「お願い!やめて!!わかった・・・!貴方について行くから、だから!!」

レンダー「あぁ、お前には俺に連いてきてもらう……こいつを潰してからな！」

そう言って、さらに熱斗の頭を踏みつけた。

熱斗「う……うぁぁぁ……！」

熱斗は痛みで顔を歪ませた。

メイル「いやー！熱斗ー！！！」

レンダー「ふはは！！お前にもわかるか？大切なものが目の前で失われる気持ちか！！！」

みづき「お願い……！お願いだから、もう……！もう、やめて……！！！」

みづきの瞳から涙が零れていった。

(ドクンッ!!)

その時だった、みづきの中で何かが動き始めた。

??? (そう、弱い者はいつも奪われるばかり・・・)

みづき「やめて・・・!」

ブルブルとみづきの体が震え始めた。

??? (もっと力があれば・・・!)

みづき「やめてっ……！」

??? (絶対に許さないっ……！)

みづき「やめろっ……！」

??? (こんな世界なんか破壊してしまえ……！)

みづき「ああああ……！」

野獣に近い雄叫びを上げ、体から光を放ちそれは徐々に強くなりすべてを押し潰すような強力な振動波が熱斗達とレンダーズを襲った。

パリパリッ・・・！！・・・パリッ！！！！。

辺りにあった窓ガラスが弾けるように割れていった。

レンドース「な、なんだ!？」

ようやく辺りを見渡せるぐらいに光が弱くなり、目の前には銀髪に真っ赤な紅色の瞳をしたみづきの姿があった。

熱斗「この姿って・・・!」

メール「また変身しちゃった・・・!？」

熱斗達は緊迫した空気の中改めてみづきの姿を見た。さっきからみづきはブツブツと小さな声で呟いていた。



みづき「許すな……！絶対に何もかも……！！」

禍々しいオーラ放ちながらギリギリとレンダーースに近づいていった。

レンダーース「チツ……！」

さすがのレンダーースも本能がやばいと言っているのか嫌な汗を垂らしながら後ずさっていく。

レンダーース（なんてオーラだ……！！しかたない、一端退却だ……！！）

レンダーース「次は覚えている！」

と捨てぜりふを吐き、一瞬して消えた。

みづき「……………」

目標の敵が消え、進めていた足を止めた。

みづき「……………」

さつきから何も発しなくなり、それどころかまるで氷のように冷たい目で周囲を見つめるみづき。

熱斗「サンキュー、みづき。助かったよ」

熱斗はそんなこと気にせず近づいた。その時、また小さな声でみ

づきが何か眩き始めた。

みづき「破壊・・・すべてを破壊せよ・・・」

突然、みづきは机と椅子を持ち上げ振り回し始めた。辺りにあった机や椅子、壁などを持っている机と椅子で壊した。

透「うわぁ!?!」

デカオ「ぎゃあ!?!」

すぐ傍にいた透たちは悲鳴を上げ、急いでその場から逃げた。

熱斗「やめろ!みづき!?!」

熱斗は背後に回り、みづきの肩を掴んだ。その瞬間、頭の中が真っ白になり、気づけば熱斗はさっきの真逆の暗闇の中にいた。

熱斗「どこだ・・・？ここ・・・？おい！メールちゃん！デカオー！透くん！やいとちゃん！みんなー！！どこにいるんだー！！・・・」

周囲を見渡しながら暗闇の中を一人歩いていると初めて聞く少女の歌声が聞こえてきた。

く人柱アリスく

『一番目アリスは勇ましく』

『剣を片手に、不思議の国。』

『いろんなものを斬り捨てて、』

『真つ赤な道を敷いていった。』

『そんなアリスは、森の奥。』

『罪人の様に閉じ込められて。』

『森に出来た道以外に、』

『彼女の生を知る術はなし。』

『二番目アリスはおとなしく』

『歌を歌って、不思議の国。』

『いろんな音を溢れさせて、』

『狂った世界を生み出した。』

『そんなアリスは、薔薇の花。』

『いかれた男に撃ち殺されて。』

『真つ赤な花を一輪咲かせ』

『皆に愛でられ枯れてゆく。』

『三番目アリスは幼い娘。』

『綺麗な姿で、不思議の国。』

『いろんな人を惑わせて、』

『おかしな国を造りあげた。』

『そんなアリスは、国の女王。』

『歪な夢にとり憑かれて。』

『朽ちゆく体に怯えながら、』

『国の頂点に君臨する。』

『森の小道を辿ったり』

『薔薇の木の下でお茶会』

『お城からの招待状は』

『ハートのトランプ』

『四番目アリスは双子の子。』

『好奇心から不思議の国。』

『いろんな扉を潜り抜けて、』

『ついさっきやって来たばかり。』

『気の強い姉と、賢い弟。』

『一番アリスに近かったけど、』

『二人の夢は、覚めないまま。』

『不思議の国を彷徨った。』

その歌は悲しく・・・そして恐ろしく、いつもみづきが歌っていた

歌とは違っていた。まるで、何もかも絶望してしまたかのような希望もない様な歌・・・。  
熱斗は歌が聞こえた方に歩くとだんだんと少女の姿が見えてきた。  
さっきの歌はきっと彼女が歌っていたものだろう。

熱斗「人・・・？」

はっと熱斗はもう一度彼女の姿を見た。よく見ると彼女は人間ではなく、ナビだった・・・。

熱斗「どうしてこんなところにナビが・・・!？」

ゆっくりと少女ナビは口を開きこう言い始めた。

「????」許さない・・・許せない・・・許せるはずがない・・・!!」



そこにいる黒と白色のセーラー服で下は黒色の半パンの姿をした銀髪のナビから発せられた声は殺気に満ちた声だった。

「????」憎い・・・人間共め・・・思い知らせてやる！！大切な者を奪われる時の怒りを・・・かけがえのない物を失った者の絶望感を！！」

ナビが熱斗の方へと顔を向けた。

熱斗「なっ！」

そのナビは人形のように美しく、綺麗な顔をしていたが血のように赤く光る瞳には底知れぬ恨みと憎しみ、怒りなどすべてが入り混じったような殺気しかなかった・・・。

熱斗「うっ・・・！！」

ナビと目が合ったとたん、激しい目まいに襲われ、意識を失った。  
……。

熱斗「……………うっ……ん……!」

目の前にはメイルたちが心配そうな目でこちらを見ていた。

メイル「熱斗!」

透「よかった!気がついたんだね!」

熱斗はようやく自分が床に寝っころがっていることに気がついた。

熱斗はまだ鉛のように重たい体を無理やり起こした。

熱斗「俺、一体・・・？」

デカオ「おいおい、覚えてないのかよ？」

やいと「みづきちゃんが急に暴れだして、熱斗君がみづきちゃんを止めようと肩に触れたとたん、二人共バタンッ！って倒れちゃったのよ」

熱斗（そうだった・・・）

じゃあ、あの夢は本当にあったことなのかなどなんでみづきの体に触れたとたん起きたのだろうかなど頭の中で考えたが何もわからなかった。

熱斗「全然わかんねえ〜・・・」

メイル「何がわからないの？」

熱斗「なんでもない。それより、みづきは？」

透「大丈夫、気を失ってるだけ」

透は視線を右側の壁に向けた。そこにはスウスウと吐息をたてているみづきの姿があった。

.....

その後、すぐにまり子先生や警察の人が来て事件について話を聞かれたけど、みづきのこととはあまり話したくなかった。この事件はウイルス事件ということで終わった。みづきもその後ちゃんと起きたけどやっぱりこの前と同じで自分が何をしたのかまったく覚えてなかったんだ。

.....

一応、名人さんや炎山たちには事件の本当のことを話し、そのことはまた後日話すと言っことで決まった。取りあえず、俺たちはみづきを家に送ってから自分たちの家へと帰った。。。

熱斗「なあ、ロックマン」

ロックマン「何？熱斗君」

熱斗「やっぱり人間を憎むナビっているのかな？」

ポツリと小さな声で言う熱斗。

ロックマン「え？どうしたの・・・！？急に・・・」

熱斗「え〜とっ・・・やっぱりなんでも無い！」

必死に笑顔を作る熱斗の心の中には別の気持ちがあった。

熱斗（人間がナビを作ったのに・そのナビが人を恨むなんて・悲しいな・）

少女の怒り（後書き）

MEIKO・KAITO・初音ミク・鏡音リン・鏡音レン

が歌っている人柱アリス YOUTubeでぜひ聞いてね〜〜¥

（\*^o^）ノ

でも、ちよつと流れる映像が怖いのでホラー系がダメな人は「ほのぼの 人柱アリス」を見た方がいいかも^^ノ!!



ようこそ、**電腦世界**へ？

こんにちは！みなさん、夢野美月です。

突然ですが、私は今コスプレ王国に來ています。

いや、來たと言うよりいたと言う方が正しいかな・・・？

さあ、なぜ私がコスプレ王国に來てるかと思っ  
ている理由はと言  
じつは  
まず

みなさん右をご覧ください！

明らかに怪しい青いヘルメットをかぶった男性が私の横を通過しました。

続いては左をご覧ください！！

もはやもう人間の顔（てゆうか顔の色が紫の時点で人間じゃねーよ！！）の形すらしていない人間らしき者が私の前を平然と通り過

ぎていきました。

そして、最後は真ん中をくぐってください〜！

全身赤タイツの上に意味不明なコスチュームを着た（一般的にはさつきからこんな格好した人が多い）女性が何故か上機嫌にスキップしながら私の目の前を通っていた。

私の周りには、見たこともないデカイビルみたいなのがいっぱい建っていた。

．．ん．．久しぶりにファンタジーな夢見てるな、私。．．は  
っ！．．待てよ私、もしかしたらここは未来という漫画的な展開に  
．．．．いや、それはさすがにないか。ていうかもしあんな格好  
が未来の服だったら私．．！未来の日本に不安を抱いちゃうよ、う  
ん。．．あれ？そうだ、何かに似てるって思ったけど、ナビに似  
てるんだ！．．え？いやいや！でもそれもさすがに無いでしょ！そ  
の前に私、一応人間のはずだし．．。なんだ、問題解決！ あは  
はは．．って何も解決してねえーじゃん！！私のバカ！！

みづき「ま、待て待て．．！！お、落ち着け私！まず状況を把  
握しよう．．！！」

そうよ、こっぴつ時こそ冷静になるのよ私！．．．って何言っ  
んだろ．．。．．んまあいや、取り合えずなぜこんなところにい  
るのかを思い出そう、うん！きつとやればできるさ！！がんばれ、  
みづき！

私は脳内の中でそう思いながら記憶を探った。

みづき「え」と．．．確か．．．熱斗が襲われて、その途端に急に意識がなくなつて．．．。もうつぎ目が覚めた時には校舎がボロボロで．．．ん」と．．．警察の事情聴取を受けて．．．早めに学校は下校になつて、一緒に確か熱斗たちと帰つて、家には無事に帰宅．．．それかゝら、それかゝら．．．あつ！そうそう！レイアとラッシュたちと少し遊んで疲れちゃつて．．．」

そうだ！コンピューターの近くにある椅子に座つてそのまんま寝ちやつたんだ！私！！

いや、だからってなんでこんなところに・・・??

自宅×私〃コスプレ王国

ってなんの方程式だよ、これ!! 私意味不明だああWWW・あ  
あゝ・・・やばい、私・・・自分が全然わからなくなってきちやったよ  
・・・。

取り合えず、元に戻る方法はただ一つ・・・それは・・・!

二度寝・・・!!

あっ！今、誰か現実逃避だ！！って思った人いるでしょ？君、ツッコミの才能無いね、ボケやった方がいいと思うよ。

みづき「二度寝しよう・・・」

みづきは最初にいた建物と建物の隙間の奥に戻り、地面に横たわった。

私だって・・・こんな・・・こんなコスプレ王国・・・いや、今から  
ドイツ王国と呼ぼう・・・。ドイツ王国の地面で二度寝するはめにな  
るとは夢にまで思わなかったよ・・・！

みづき「うう・・・！もういいよ・・・ううなったらふて寝してやる  
うう・・・！」

みづきはなぜか二度寝と言っよりふて寝に近い状態で寝ようとしてた。



みづき（アディオス・・・！ドイツ王国よ・・・！）（

ドイツ王国との別れを惜しみ、夢の世界に終止符を打とうとしたときだった。

ガッシャン！ガッゴンッッ！

みづきは一気に現実の世界へと引き戻された。

「？？？」おい、ふざけてんじゃねーぞ！

「????」「ヒイイイーーーー!!!!」「プクッ!!!!」

どうやら何者かと何者かたち争っている様子だった。さすがに見逃す訳にもいかずどうしたものかと思つた。影から見守るみづき。そこには、魚のような顔をしたブサイ・・・男らしき者達とみずみずしいタラコ唇をした小柄な男がいた。

バブルマン「助けてくれプクッ!!!!」

タラコ唇の男の人は、私の存在に気づいたのか私の背中に逃げ込むようにして入ってきた。

みづき「ちよ、ちよっと！ たった一人の人にいい年した大人が  
何やってんですか！ カツアゲですね！ 早く消えないと警察呼びます  
よー！」

みづき（）まあ、ここに警察と言つものがあるかどうかも知ら  
ないけど・・・（）

悪人ナビA「嬢ちゃん、その男をよこしな。そいつは俺たちに  
金借りてんだよ」

悪人ナビB「そうだ、そうだ。痛い目合う前にさっさとよこしな、ヒビヒビ!!」

え?じゃあ、何?この人たちは日本で言つと闇金みたいな人たち?

悪人ナビC「さっさとよこしなつて言つてんだろぅが!」

魚顔の三人の内一人が私に掴みかかってきたので私は思わずそれを避け、肘てつを喰らわせた。

ああ・・・！やってしまった・・・！！つつい昔の本能が出てしまった。・・・まあ、今は、時間がないから私の昔の話はまた今度ね。

悪人ナビC「うぎゃああ！！！」

悪人ナビCは情けない声をあげながら壁に叩き付けられた。（めりこんでると言った方が正しいのか？）

悪人ナビB「ヒッ！なんだあの女！？」

悪人ナビA「ば、化けもんだ・・・！」

一瞬ひるんだ悪人ナビたちだったが、すぐに体勢を立て直し、襲いかかってきた。

悪人ナビA「この野郎！！」

悪人ナビAはみづきの肩を素早く掴み、壁に叩きつけた。

みづき「痛っ・・・！」

みづき（）何コレ・・・！？痛い・・・！夢じゃないの？ここは・・・  
！）

悪人ナビA「俺達、フィッシュブラザーズを怒らせて生きて帰れると思つなよ？」

悪人ナビB「兄貴、やっちやいましょう！」

悪人ナビAがみづきの胸ぐらを掴みあげた瞬間、みづきの体から光が滲みでるように溢れだしてきた。徐々に漆黒の髪の毛からプラチナロンドンのような美しい銀髪に変わり、黒い瞳は血のように真っ赤な瞳に姿を変えていった。そして、ゆっくりと自分の胸ぐらを掴んでいる悪人ナビの手を掴み、ギシギシと嫌な音が立てて、悪人ナビが悲鳴を上げた。

悪人ナビA「ぎああああややや!!」

悪人ナビAは慌ててみづきから手を離した。





辺りにカマイタチのような鋭い風と強い突風が起こった。カマイ  
タチのような風が建物や三体のナビの体を容赦なく斬りつけ、突風  
が大きくナビたちを吹き飛ばした。

みづき「……………」

ゆっくりと三体のナビたちに近づいていくみづき。

悪人ナビB「ヒ、ヒッ！お、覚えていろよ！！」

そう言って、仲間のナビ二体を持ち上げて逃げていった悪人ナビたち。

みづきはナビたちがいなくなった途端、その場にフラリと倒れた。

バブルマン「プ・プク・プク」

物陰に隠れていたバブルマンが恐る恐るみづきの傍により、肩に担いだ。

バブルマン「しっしっかなりすぐでプク」

みづき「……ん」

「バブルマン」ここにアイスマンたちの秘密基地があるプクッ！そ  
こまで頑張るプクッ！！」

「**電腦世界の迷子ちゃん！？**」

みづき「うーん・・・あれ？ここは・・・」

バブルマン「気がついたでプクか？」

みづき「う、うわっあああ！！！！？」

何をそんなに驚いてるかって？それは今私のcm前に巨大タラコ唇があるからだ。

私はビククリして端っこに後ずさった。

バブルマン「どうやら大丈夫みたいプクね」

みづき「えっと・・・あなた・・・誰？」

バブルマン「僕はバブルマンでプク！よく覚えとくといひプク！」

みづき「へ〜（変わった名前だね）、なんかまるでナビみたい・」

バブルマン「お前は？」

みづき「私はみづき。夢野美月よ、よろしくね」

バブルマン「そうプクか（なんか人間みたいプク。それに服とかも・・・）」

みづき・バブルマン（まあ、そんなハズないか（プク））

こんな奇妙な出会いの中、現実世界は……。

熱斗「うわゝ……！なんだ、これ？」

熱斗・炎山・ライカこの三人は今日電脳世界で起きた謎の通り魔事件を調査していた。今は、会議室にモニターを広げ現場の解析をしている最中だ。

熱斗「随分と派手にやったな」

炎山「見事に建物が綺麗に切れてるな……。風属性のしわざか……？」



ライカ「ああ……。まるで本物のカマイタチにでもやられたか  
のようだな」

ロックマン「熱斗君！」

三人が悩んでいる最中の中、ナビたちが帰ってきた。

熱斗「おー！お帰り、ロックマン。どうだった？」

その返事はロックマンではなく、ブルースが答えた。

ブルース「目撃者から怪しい銀色のナビがナビ三体を襲っていたという証言が得られました、炎山様」

サーチマン「そして、その銀色のナビは少女ナビだったとか」

ライカ「銀色の少女ナビか・・・」

炎山「取り合えず、襲われていたと言っナビたちを見つけた方が良さそうだな」

ようやく話がまとまりかけていた時に熱斗のPETにロールがやって来た。

ロール「熱斗君」

熱斗「あっ！ロール、居たか？」

ロールは残念そうに首を横に振った。

ロール「ううん、メイルちゃんたち一生懸命探したんだけど、見つからなかったわ・・・」

熱斗「そっか・・・」

うなだれる熱斗の肩に炎山の手が掛かってきた。

炎山「おい、熱斗。会議中だぞ、何をしている」

熱斗「いや、実はさ・・・」

炎山・ライカ「はあ！？夢野が行方不明！！？」

熱斗「そうそう、昨日まで確かに一緒だったんだけど、今日学校来なかったんだよ」

炎山「ただの休みじゃないのか？」

ロックマンはホログラム状態で現れた。

ロックマン「それがみづきちゃん、学校に連絡してないみたいなんだ。さつきまり子先生がみづきちゃん家に電話したらいいんだけど、留守番電話で……。昨日のこともあったし、心配でメールちゃんとロールちゃんたちに頼んで様子を見に行ってもらってただけど……」

ライカは顎に手を付け考え始めた。

ライカ「確かに・・・少しおかしな話だな・・・」

炎山「神隠しにでもあったかのような・・・」

熱斗「かみ・・・かくし・・・？」

ロックマン「子供が突然行方不明になってしまうことだよ、熱斗君」

ロックマンは熱斗にもわかりやすく教えた。

ロール「はぁー・・・どこに行っちゃったのかした？みづきちゃん」



【電腦世界の迷子ちゃん!? (後書き)】

おもしろい歌を見つけたのでみなさんよかったら聞いてね　もう知  
ってる人もいると思うけど・・・。

ラフ・メイカー

B U M P   O F   C H I C K E N

涙で濡れた部屋にノックの音が転がった

誰にも会えない顔なのにもうなんだよどちら様？

「名乗る程　たいした名じゃないが　誰かがこう呼ぶ　”ラフ・メ  
イカー”

アンタに笑顔を持って来た　寒いから入れてくれ」

ラフ・メイカー？冗談じゃない！　そんなモン呼んだ覚えはない  
構わず消えてくれ　そこに居られたら泣けないだろう

ルララ　ルラ　ルララ　ルラ

大洪水の部屋にノックの音が飛び込んだ

あの野郎まだ居やがったのか消えてくれって言ったろう

「そんな言葉を言われたのは生まれこの方初めてだ  
非常に哀しくなってきたどうしよう泣きそうだ」

ラフ・メイカー？冗談じゃない！アンタが泣いてちや仕様がない  
泣きたいのは俺の方さこんなモン呼んだ覚えはない

ルララ ルラ ルララ ルラ

二人分の泣き声 遠く………

ドアを挟んで背中合わせしゃっくり混じりの泣き声

膝を抱えて背中合わせすっかり疲れた泣き声

今でもしっかり俺を笑わせるつもりかラフ・メイカー

「それだけが生き甲斐なんだ 笑わせないと帰れない」

今ではアンタを部屋に入れてもいいと思えたが  
困った事にドアが開かない溜まった涙の水圧だ  
そっちでドアを押してくれ鍵なら既に開けたから  
ウンとかスンとか言ってくれ  
どうした？おい、まさか



ラフ・メイカー？冗談じゃない！今更 俺一人置いて  
構わず消えやがった信じた瞬間裏切った

ラフ・メイカー？冗談じゃない！逆側の窓の割れる音  
鉄パイプ持って泣き顔で「アンタに笑顔を持って来た」

ルララ ルラ ルララ ルラ

小さな鏡を取り出して俺に突き付けてこう言った 「アンタの泣き  
顔笑えるぞ」

呆れたがなるほど笑えた

みなさん、間違っても鉄パイプ持って人ん家入りこんじゃダメ  
ですよ

歌を唄う歌姫（前書き）

これを書いている時にもう設定が無理矢理すぎると自分でも思ったよ

（あは、あははははははははは！！！！！！ゲホッ！）

むせた

## 歌を唄う歌姫

みづき「あっ、バブルマン！怪我してる」

みづきはバブルマンの右腕を掴んだ。

バブルマン「だ、大丈夫でプクよ、このぐらい」

みづき「ダメよ、動かないで」

そう言って、みづきはそっと目を閉じて意識を集中した。

みづき（お願い、ボイス・メロディ・・・力を貸して・・・！）

みづき「ボイス・メロディ！起動開始」

そう願った瞬間、ボイス・メロディがみづきの頭に姿を現し、緑色の淡い輝きを放った。

「貴方に花を 私に唄を」

「名前なんていらないよ」

「君が呼んでくれないなら」

「鈴のよつに 鳥のよつに」

「雨のよつに 風のよつに」

『草のよつに 海のよつに』

『星のよつに お湯のよつに』

『袖のよつに 本のよつに』

『猫のよつに かぼちゃのよつに』

『そんな風にはなりたくない』

『そんな風にはなりたくないよ』

『いつか崩れてしまつたら』

『今壊してしまつて』

『自分のものにしてしまいたいよ』

『いつか壊れてしまうなら』

『今捨ててしまつて』

『自分から捨てたんだつて』

『だから名前なんていららないよ』

『君が呼んでくれないなら』

『名前なんていららないよ』

『君が呼んでくれないなら』

『名前なんていららないよ』

『君が呼んでくれないなら』

『名前なんていらぬよ』

『君が答えてくれないなら』

『最後に花をもらったのはいつだろう』

『最後に花を贈るのは誰だろう』

白い花びらがバブルマンの傷ついた体を癒し始めた。花びらは、バブルマンの体に当たると弾けるように光って、雪が溶けていくみたいに見える。

バブルマン「す、すごいプク！こんな技を持つナビ、初めて見たプク・・・」

気づくと、バブルマンにあつた体中の傷はすっかり癒え、よくなっていた。その時、バブルマンの顔が何かに気づくような表情見える。

バブルマン（待ってよプク……。これは、使えるでプクよ！）

みづき「どつしたの？そんな鳩が豆鉄砲でも喰らった様な顔して・・・」

バブルマン「ちょっとこっちに来るプク」



みづき「えっ？えっ??何？ちよっ！へっ！!!??」

.....

バブルマン「よし、ついたでプク！」

みづきは結局何もわからぬままインターネットシティの中央にある大きな噴水がある場所へと連れてこられた。たくさんのナビたちが通り過ぎていく。

バブルマン「おっ、ちんちん入ってプク」

なぜかそこには、マイクが設置されており、みづきは押されるようにしてその場に立たされる。バブルマンはニコニコと笑顔作り、みづきにその笑顔を向ける。

バブルマン「僕にさっき聞かせてくれた素晴らしい歌をぜひ、もう一度聞かせてほしいプク」

みづき「へ・・・?でも、なぜとニコニコで??」

バブルマン「えっと・・・それは・・・その、ここは僕の一番のお気に入りの場所だからここで・・・」

みづき「へ〜!」

バブルマン「歌ってくれるプクか?・・・」

みづき「別にそうゆうことならいいよ」

バブルマンの邪悪な悪だくみにみづきは全然気づかず、ボイス・メロディを呼び出す。ボイス・メロディから綺麗な緑色の光が輝く。

～ローリンガール～

『ローリンガールはいつまでも 届かない夢見て』

『騒ぐ頭の中を掻き回して、掻き回して。』

『「問題ない。」と呟いて、言葉は失われた？』

『もう失敗、もう失敗。』

『間違い探しに終われば、また、回るの!』

『もう一回、もう一回。』

『「私は今日も転がります。」と、』

『少女は言う 少女は言う』

『言葉に意味を奏でながら!』

『「もう良いかい？」』

『「まだですよ、まだまだ先は見えないので。息を止めるの、今。

「  
』

『ローリングガールの成れの果て 届かない、向こうの色』

『重なる声と声を混ぜあわせて、混ぜあわせて。』

『「問題ない。」と呟いた言葉は失われた。』

『どうなったって良いんだってさ、』

『間違いだって起こしちゃおうと誘う、坂道。』

『もう一回、もう一回。』

『私をどうか転がしてと』

『少女は言う 少女は言う』

『無口に意味を重ねながら!』

『「もう良いかい?」』

『「もう少し、もうすぐ何か見えるだろうと。息を止めるの、今。」』

『もう一回、もう一回。』

『「私は今日も転がります。」と、』

『少女は言う 少女は言う』

『言葉に笑みを奏でながら！』

『「もう良いかい？もう良いよ。そろそろ君も疲れたらうづ、ね。」

』

『息を止めるの、今。』

パチパチパチパチ！！！！

みづき（へん？）（）

よく見ると色々なナビたちがみづきに拍手や歓声を送っていた。

ナビA「いい歌だったぞー!!」

ナビB「なんだ?なんだ?ライブか?」

ナビC「アンコールだ!」

アンコール!アンコール!!アンコール!!!

みづき「え?え、ちょっと、バブル・・・」



とみづきはバブルマンのいる方を見たがバブルマンの姿はどこにもなかった。

みづき「って・・・居ないし!！」

みづき（ん？でも、このまま歌えばもしかしたら、熱斗たちが気づいてくれるかもしれない）

チラリとみづきはナビたちの様子を見る。

みづき（まあ・・・この様子じゃ、唄を歌はないと帰れそうに  
もなさそうだし）

みづき「よし、じゃあもう一曲!！」

ナビたち「「「「「おおおおー!！」「「「「

以外とみづきはノリが良かった。

くブラック ロックシューターく

『ブラックロックシューター 何処へ行ったの？』

『聞こえますか？』

『あとどれだけ叫べばいいのだろう』

『あとどれだけ泣けばいいのだろう』

『もうやめて わたしはもう走れない いつか夢見た世界が閉じ

る

『真っ暗で明かりもない 崩れかけたこの道で』

『あるはずもないあの時の希望が見えた気がした』

『どじりして』

『ブラックロックシューター 懐かしい記憶』

『ただ楽しかったあの頃を』

『ブラックロックシューター でも動けないよ』

『闇を駆ける星に願いを もう一度だけ走るから』

『怖くて震える声でつぶやく わたしの名前を呼んで』

『夜明けを抱く空 境界線までの距離 あともう一步届かない』

『こらえた涙があふれそうなの 今下を向かないで』

『止まってしまっ』

『未来を生きていたんだ わかったの 思い出して』

『強く 強く 信じるの』

『そっよ』

『ブラックロックシューター 優しい匂い』

『痛いよ 辛いよ 飲み込む言葉』

『ブラックロックシューター 動いてこの足！』

『世界を超えて』

『最初からわかってた ここにいることを』

『わたしのなかの 全ての勇気が』

『火をともして』

『もう逃げないよ』

『ブラックロックシューター ひとりじゃないよ』

『声をあげて泣いたって構わない』

『ブラックロックシューター 見ていてくれる』

『今からはじまるの わたしの物語』

『忘れそうになったら この歌を』

『歌うの』

## 歌を唄う歌姫（後書き）

今回の歌はみんな初音ミクが歌っている唄です\*^^\*ノ

ローリングガールを歌ってみたで一番好きなのはグリリさんという  
お方が歌っている歌です。ぜひみなさんもyoutubeで聞いて  
くださいね！

## 利用価値

ある日、インターネットシティで悪だくみを考える悪いナビがいた。

バブルマン「プクプクク・・・！」

バブルマン（こいつを利用して、お金をガツポリと稼ぐプク！いや・・・バトルも強いからなんらかの理由でもつけてロックマンを倒すって言うのもありでプクね・・・。まさに一石二鳥でプク！）

バブルマンにしては、なかなか頭のいい作戦だった。

バブルマン（そうだプク・・・。勝手にどっか行かないよう釘でも刺しとくかプク）

.....

みづき「ふう・・・」



なんとか歌え終えたみづきに気づかれないよう近づくとバブルマン。

みづき「・・・あっ！バブルマン！！」

みづきはバブルマンの姿をとらえ、ものすごい勢いでバブルマンに抱きつく。

バブルマン「ぐえー！」

カエルが潰されるような声がバブルマンの口から漏れる。

みづき「バカバカバカー！！どこに行ってたのさあぁ！」

ギョウギョウー！！

バブルマン「っ、潰れ……」

ギギギギギツツ……!!

みづき「大変だったんだからね！バブルマンはいなくなるわ、なぜか歌を歌うはめになるわ、ライブ状態になるわ……！でも、戻ってきてくれたから許してあげ……ってあれ？」

よつやくバブルマンの異変に気が付くみづき。

みづき「きあああああやっ……！（。）。（）どっしたの！  
？そんな体より真っ青な顔色になって……！」

みづきはブンブンとバブルマンの肩を揺さぶる。バブルマンは、  
じゅっ……とじゅめき声を上げながら小さくじゅっ咳く。

バブルマン「お、お前のせいだプク……。ガクッ」

みづぎ「NOおおおおー！！！！」

.....

「????」リーガル様、どうやら夢野美月がインターネットシティに迷いこんだようです」

リーガル「そうか……。そのまま監視を続ける」

「???? わかりました・・・イッヒヒ・・・!!」

不気味に笑いながらモニターに移っていた歳を取った白衣姿の男の姿がピツと音を立てて一瞬にして消えていった。辺りが暗いせいかリーガルの表情は、よくわからずその後ろにいたレンダー스가重々しく口を開く。

レンダース「リーガル様・・・」

リーガル「ああ・・・ナビ化は順調に進んでいるようだ。後少しで夢野美月は・・・」

どこからか反射してきた光がリーガルの顔の当たり、表情がわかる。その時のリーガルの目酷く残酷な目をしていて、静かにだがかすかに笑いを含んだ声でこう呟いた。

リーガル「クレン」に変わる「

利用価値(後書き)

感想がほしいよ〜)

(!!!!

## バブルマンの警告？

みづき「バブルマンのさっきの話本当かな・・・？」

（数分前）

バブルマン『いいでプクか、このインタネットシティには怖くてそれは恐ろしいと恐れられている怪物がいるんでプク』

ゴックン・・・！

みづき『そ、その怪物ってどんななの？』

いつにもなくすぐ真面目な顔するみづき。

バブルマン『そ、それはもうすごいでプクよ!』

みづき『ど、どんな風にすごい?!?!』

だんだんとみづきの声が高くなったり、低くなったりして狂っていく。

バブルマン『ど、どんな風に?!?!いや、いや、もうその姿はゴリラよりデカく黄色い体をしていて、見た目は少し優しそうでも実は、凶暴で悪逆非道で、とにかくすごく危ないんでプク』

みづき『そ、そんな危険人物がここにはいるの?!?!』



バブルマン』でも、この僕と一緒にいけば大丈夫ブク!』

. . . . .

みづき「って言われたそばから迷子になるなんて．．．!」

みづき（我ながら私って．．．! ああ．．．! や、やばい．．．  
目から涙が零れそうだわ．．．）

まるで世界の終りのようにどんよりと落ち込んでいると後ろから  
声を掛けられた。

ガッツマン」「こんなところで何やってるでガス？」

みづき「あのいや・・・実は・・・迷子になってしまっ・・・！！  
！？」

みづきはガッツマンを見て石のように硬直してしまった。まるで  
自分の部屋にゴキ　リが出た時みたいなりアクションだ。

みづき（）・・・黄色い体・・・ゴリラよりデカイ・・・？（）

ガッツマン「???どうしたんでガスか??」

ガッツマンは、眉を顰めみづきの肩に手を置こうとする。だがその手を阻止するように、みづきの両腕がガッツマンの右手を掴んだ。

みづき「私に・・私に・・!触るんじゃねえええええ!!!!」

みづきは突如、カッと目を見開き、力いっぱい腕に力を込める。

ガッツマン「ガ、ガスウウツ!!?」

グルングルンとまるでハンマー投げのように回り、勢いよくガツツマンを壁へと投げつけた。

ガツツマン「ガスウウウウウツツッ！……！！」（涙目）

ドカアアアンツツッ……！！……！！……！！

みづき「いやああああ……！！……！！……！！でたああああ……！！……！！……！！」

涙目「

一回も後ろ振替えずに全速力で逃げていくみづき。みづきが立ち去ってもまだ砂煙が舞っている。

ガッツマン「うん……ガスト……」

もうそこには、完全に伸びているガッツマンと壊れた壁しか残されていなかった。

バブルマンの警告？（後書き）

くおまけく

みづき「バブルマアアアアン！！」

バブルマン「あっ！いたでプク！」

仁王立ちで憤慨しているバブルマン。

バブルマン「いったいどこに行ってたプ・・・グエエー！！」

突如走りながら何かから逃げる様子のみづきに思いっきり腕を引っ張られるバブルマン。

バブルマン「も、もげるでプクッ・・・！」

みづき「いいから早く逃げてええええ！！！！（号泣）」

みづき（熱斗、炎山、メイルちゃん、みんな・・・ヘルプミ  
イイイイイイイッッ！！！！）

みづきはその時、無我夢中で逃げたとさ

科学省侵入大作戦！！&お知らせ（大切なので見てね^^）（前書き）

みなさんも知つてのとおり、歌詞掲載ガイドライン追加のお知らせ（対応強化）により歌はもう使えなくなりました・・・でも！私はこれからも歌は使えなくてもこの小説を完成させていきたいので読者のみなさんご協力お願いします^^！！

でも、少し工夫をして歌をだせたらいいな・・・だつて、全部いい曲なんだもん！



科学省侵入大作戦！！&お知らせ（大切なので見てね^^）

みづき「ぜはあゝゝぜはあゝゝ！ゝゝあれ？」  
「？」

バブルマン「知らないで走って逃げたんでプクか？」

みづき「（ギクッ！）め、めんぼくないゝゝ」

しょんぼりと顔を伏せるみづき。

バブルマン「ってん？」こはゝゝ」

バブルマンは辺りを見渡すと目の前にはとても大きいファイヤー

ウォールが立ちはだかっていた。

バブルマン「科学省プク・・・」

みづき「え？なんかわかったの!？」

みづきは嬉しそうに目を輝かせる。

バブルマン「ええ・・・っとここはでプクね・・・」

回答に困るバブルマンに突然、いいアイデアが浮かんだ。

バブルマン「な、なんとここは世界を征服しようとしてる悪いやつらの秘密基地なんでプクー!!」

バブルマンのその答えに石のようにまた固まって動かなくなるみづき。

バブルマン（）さ、さすがに、これは・・・信じないプクか・・・  
逆に僕が怪しまれるプク（）

バブルマン「え〜っと・・・これは、そのじょうだ・・・」

慌てて言いなおそうとするバブルマンに、みづきは体を震わせ衝撃を受けたような顔でこう言った。

みづき「な、なんだってええ・・・!!」

バブルマン（ば、馬鹿がここにいたプクッ！！）

バブルマンが呆れて口を開けてただみづきを見る。

みづき「そんな！大変じゃない！！タイツ王国滅亡の危機じゃない！！ってゆうかなんで警察はこんなデツカイ秘密基地を見つけれないの！？」

ビシリとみづきはファイヤーウォールを指す。

バブルマン「タ、タイツ王国・・・？」

バブルマン（まあ、いいプク・・・うまく乗ってくれたみたいだし・・・プクプク・・・！！）

バブルマンの考えた作戦はこうだ

1・みづきを騙して、科学省の中に入る

2・取り合えず、敵を倒しながら研究所のデータを盗む

3・後は、みづきを置いて逃げて研究所のデータを外で高く売り飛ばす

かなりザックリしたプランだが、成功すればバブルマンは儲かる。それには、もうちょっとみづきもやる気にすることをしなければならぬ。

バブルマン「あっ！そうだ・・・奴らはここで何か怪しい研究をしてるブク。もしかしたら、みづきが望む物もあるかもしれないブクよ？」

みづき「私が・・望む物・・？」

みづき（もしかしたら、ここにこのタイトツ王国から抜け出す方法があるかもしれない・・）

みづきは考え込んだ結果、バブルマンと一緒に乗り込むことにした。そうすると、バブルマンが金髪のカツラのプログラムと全身を隠すような藍色のマントを渡してきた。

みづき「え？なんでこんな格好するの？バブルマン」

バブルマン「敵に正体がばれたら危ないプク！」

そう言って、バブルマン自体もマントで姿を隠す。

みづき「そっか、でもなんか・・・これじゃ泥棒みた・・・」

バブルマン「早く行くでプクよ!」

みづき「・・・はい」

.....

熱斗「ロックマン、なんか手がかりあったか？」

ロックマン「ううん、銀色の少女ナビの情報は一つも・・・」

その頃、ロックマンたちは正体不明のナビ探しをしていた。

熱斗「はあゝ・・・なんで見つからないんだろう・・・？まるで、消えちゃったような・・・」

炎山「いや、この短時間でそう遠くまで行ってないだろう」

だらしなく椅子にもたれ掛っている熱斗にゆっくりと近づく炎山。  
ライカもなかなか進まないこの状況に唸り声を上げる。

ライカ「なぜだ・・・？なぜ誰も見ていないのだろうか？一人や二人ぐらいは見てもおかしくないはずなのに・・・」



炎山「逆にどうやって誰にも見られていないだ？」

熱斗「もしかしたら、姿を変えてたりして？」

熱斗はもちろん冗談半分で言ったが、二人はそれに大きく食いついてきた。

炎山「そうか・・・それだ！！色や形を少しだけ変えれば目立たない！」

ライカ「お手柄だぞ、熱斗」

熱斗「え？えっ・・・！？」

あまりの展開で熱斗もビックリしている。そんな中に、泣き声に近い悲鳴を上げながらデカオが会議室に入ってきた。

デカオ「熱斗おおおおお！！！！！！」

熱斗「うわぁ！？なんなんだ今度は！」

デカオはグワと鼻水と涙に汚れた顔を持ち上げ、熱斗にすかさず自分のPETを見せる。中にはダメージを受けたガッツマンがいた。

熱斗「おい、これ・・・！どうしたんだよ！！」

デカオ「俺にもわからねーんだ……。ただ、ちょっと目を離した際にガッツマンがプラグアウトになってて……。ガッツマンが言うには、少女ナビにやられたとか。」

炎山「何っ！本当か！？それは！！！」

デカオに問い詰める炎山。

デカオ「ほ、本当だって！俺が嘘つくはずがないだろ！」

ライカ「銀色ではなかったか？そのナビの色」

デカオ「いや、そこまで言っただけ……」

ロックマン「これは炎山たちの推理あながち間違いではなさそうだね」

ロックマンがそう呟くと光博士が会議室に入ってきた。

光博士「ん？どうしたんだい、そんなにみんな集まって・・・」

熱斗「あっ！パパ！」

熱斗は光博士の元にデカオのPETを持っていき、事情を説明した。

光博士「うん・・・大丈夫、これぐらいならすぐに治るよ」

熱斗「本当!？」

光博士「ああ」

ロックマン「よかったね!デカオ君!」

デカオ「ああ!サンキュー!ロックマン、熱斗!」

科学省侵入大作戦！！&お知らせ（大切なので見てね^^）（後書き）

なんか中途半端で終わってしまった・・・

力任せはご用心？

変装をし、みづきたちはついに科学省に潜入しようとしていた。だが、やはり科学省の方の警備も厳しかった。バブルマンはコントロールパネル、そしてみづきは辺りの警備を見に行った。

みづき「ふう〜・・・」

バブルマン「どうだったでプクか？」

みづきは疲れた様子で首を横に振った。

みづき「ダメ・・・ガードマンがそこら中にいるよ」

そうみづきが溜息をついた時、バブルマンの方からもアクセスエ

ラーの音が鳴った。

バブルマン「このパスワードでもないでプクか・・・」

バブルマン（いつもシェードマン様が誰かの手を借りていたからプクな・・・）

バブルマンもついつい溜息が出てしまう。やっぱりいざとなると侵入は難しい。バブルマンの力じゃファイヤーウォールを破るどころか跳ね返されてお終いだ。そんな時、みづきが何か閃いたように手をポンツと叩く。

みづき「あっ！そうだ！なんでこの手を使わなかったんだろ  
うー！」

そう言つとコントロールパネルの前に立ち、拳を作るみづき。



バブルマン「あゝ……みづき……(汗)」

みづき「うらあああああ……！」

バキンンンッッッ……！！！！

コントロールパネルが潰れた壮大な音がした。

バブルマン(ぎあああああああ……！！！！)

バブルマンは慌てて、みづきを止めに入るがみづきはバブルマンに有無も言わず、コントロールパネルを殴る。

みづき「とじや……とじや……とじやあ……！」

バブルマン「や、やめるプク!」

みづき「ちょっと待って、後もう一発^^」

その最後の一発が止めの一発だったのか、ウィーンウウ・・・と音を立て、コントロールパネルは機能を失った。バブルマンは堪忍袋の緒が切れたのか、みづきへの怒りを露わにする。

バブルマン「いい加減にするプクウウ!! さっきからなんでプクかあああ!」

みづき「いや・・・だって機械って叩けば何でも治るでしょ?」

てへ と舌を出して、謝るみづき。

バブルマン（あ、あれが叩いてる・・・だどっ・・・！！！！）

内心はひええええー！！と思っっているが、この怒りは止められなかった。

バブルマン「だからってやりすぎプクウ！！これを見てみるプク！もう、スクラップみたいになっちゃてるじゃないでプクかあ！！（怒）」

バブルマンの指が指す方向には確かにもう影も形もない哀れなコントロールパネルがある。

みづき「あ、あはは・・・」

苦笑いしながら、目を逸らすみづき。

バブルマン「とにかく、力任せに物を壊すなプク!!」

頭ごなしに怒られ、ちょっとカチンとくるみづき。

みづき「でも、このままじゃいつまで経っても中に入れないじゃん!!何かバブルマンいい案があったて言うの!!」

バブルマン「うっ・・・」

そう言われると声が詰まるバブルマン。今度はみづきがぐちぐちとバブルマンに言い始める。

みづき「ほら!やっぱりないじゃない!!なんか当てがあった時に文句言いやが・れ・・・じゃなかった・・・!言いなさいよ!バブルマンの・・・バー!カー!カー!」

みづきの怒号と丁度にはぼ八つ当たりで出たキックがファイヤー

ウォールに思いっきり当たった。

みづき・バブルマン」「あ・・・」

ピシッピシ・・・！

みづきの蹴った場所から亀裂ができ、その亀裂はどんどんと広がってゆく。

ピシッ・・・パキッ！パキパキッ・・・！！バアリンッッ！！！！

天空が二つに割れるようにそれは見事に割れた。

「みづき」「おおー！！」

みづきは顔を上に上げ、感嘆の声を上げた。

バブルマン「……………」

バブルマンはみづきの凄さに慣れてきたのか冷静だった。

バブルマン（「なんだが、もう……慣れてきちゃったブク……」）

453

バブルマンは、もう何が来ても大丈夫だなと遠い目をしながら思った。

バブルマン「ん？ちょっと待てよ……こんなに派手に壊したら……」

ブーブー！！侵入者あり侵入者あり！！ブーブー！！

天井から赤い光とランプが出てき、警報も大きく鳴り響く。そして、数分もしない内にみづきたちのもとへガードマンナビたちがやってきた。

ガードマン「いたぞ！！侵入者だ！！」

ガードマンの大群を見た時、みづきとバブルマンは顔を合わせ、同じことを思った。

みづき「バブルマン……」

バブルマン「みづき……」

何かロマンチックな雰囲気の流れる中、同時二人が発した言葉はこうだ。

みづき・バブルマン「……逃げよう!」「」

もう回りはガードマンでいっぱいだったので急いで科学省の中に入り、マッハで逃げる。その速さには、ガードマンも敵わなかった。

……

科学省↪現実世界↪



研究者A「光博士！侵入者です！！」

熱斗たちに緊迫したその場の空気が張り詰める。

光博士「モニターを！」

研究者B「モニター移します！！」

その場に大きいスクリーンが出る。そこにはガードマンナビに追いかけてられているマントを被った二人の姿が見えた。モニター半分にガードマンナビの顔が現れる。

ガードマン「現状報告をします！侵入者はBブロックを通過、そしてその侵入者はバブルマンと少女ナビです！！」

熱斗「少女ナビ！」

炎山「噂をすればだな・・・」

ライカ「我々も直ちに向かおう！」

炎山「光博士」

炎山は光博士の顔を見て、光博士も首を何も言わずにゆっくり縦に振る。熱斗も椅子から立ち上がった。そんな熱斗見て、デカオは熱斗を呼び止める。

デカオ「熱斗・・・頼むぜ・・・！ガッツマンの仇・・・」

熱斗「わかってる、なあ？ロックマン」

熱斗は手に持っているPETの中の親友に語りかける。

ロックマン「うん！」

熱斗「よし！行くぜ！！」

三人はPETを握り、プラグインできる場所に真っ直ぐに向ける。

熱斗「ロックマンEXE！」

炎山「ブルース！」

ライカ「サーチマン！」

三色のPETが同じ場所に向けられる。

熱斗・炎山・ライカ「トランスミッション!!!」

力任せはご用心？（後書き）

なんかバブルマンツッコミキャラになっている……。

銀色の闇「まあ、そんなことより次話は最近出番が少なかったナ  
ビたちが大活躍するよ^^^^!!それにまさかの戦いが!？」

ロックマン「次も」

熱斗「また見るよな!」

辛く、重いその声はどこへ行く？

ただ広い科学省の中を無我夢中で逃げるみづきとバブルマン。

みづき「ねえ・・・？どこに行けばいいの・・・はあ・・・はあ」

さすがに全速力で逃げ続けていれば、息切れも早くなる。

バブルマン「取り合えず、データエリアに行くでブク・・・！」

バブルマンも息が切れながらもみづき指示を出す。

みづき「わかった」

ブルース「残念だが、ここまでだ」

みづき「！？」

みづきたちの前に長い銀髪の赤いナビが道を塞ぐ。

バブルマン「ブ、ブルース・・・！」

バブルマンの顔に嫌な汗が流れる。みづきもなんとなくブルースから感じるオーラに反応していた。

みづき（この人の鬨気・・・半端じゃない！・・・間違いない、この人デキる・・・！！）

ゴクリと唾を飲み込むみづき。

ブルース「ふん、敵わないとわかって少女ナビの用心棒でも連れてきたのか？バブルマン！」

バブルマン「チッ！バレてたブクか」

バブルマンは纏ってたマントを大胆に脱ぎ捨てる。



バブルマン「今日の僕は一味違つてプク！！行け、みづき！」

みづき「えっ、ええええええ！！！？私かよ！？」

ビックリしすぎて、人差し指で自分自身を指すみづき。

みづき「無理無理！！私何も武器持ってないし！」

確かにこのままではみづきが完全に不利だ。

バブルマン「そう言うと思って、ちゃんと武器は持ってきてる  
プク！」

ガサゴソと自分の体を漁り、短い棒みたいのを取り出しみづきに  
渡した。

バブルマン「じゃ、後は頼むでプク！」

みづき「えっ！ちょお、バブルマン！？」

バブルマンはブルースの相手をみづきに押し付け先にへと進んで

いた。

ブルース「あいつはああ言う男だ。残念だったな」

同情するかのような声でブルースはみづきを見ながら言う。

みづき「でも、悪者なんかに負けない・・！」

みづきの瞳にはいつもにない闘気が燃えていた。ブルースは眉を顰める。

ブルース「悪者・・？なんのことかわからんが、一つだけ言うてやろう・・悪者はお前らの方だ！」

ブルースは手を剣に変え、みづきに切りかかる。

みづき（腕が剣に・・・！？）

みづきは何とかブルースの攻撃を交わす。それから見間違いじゃないのかと思い、ブルースの腕をもう一回見るが、やはり腕から剣が生えている。

みづき「じゅ、銃刀法違反だろ〜．．！！」

みづき（「タ、タイツ王国怖えええー！！！！」）

慌てて何か武器がないかと探すみづき。さっきバブルマンから貰ったばかりの武器を思い出す。みづきは手に握りしめていた短い棒を見る。

みづき「そうだ！あつ．．でもこれどうやって使うんだろっ？」

しまった〜！使い方聞くの忘れてたあー！！と思いつつ、色んな角度で棒を見ると下にスイッチみたいなのがあった。取り合えずスイッチを押すと短い棒の先から新たに棒が伸び、長い棒へと変化していった。

ブルース「行くぞ！！」

ブルースまたみづきに切りかかるが、みづきは今度はそれを避けず棒を横にし剣を受け止める。みづきはブルースの腹部に蹴りを入れるがギリギリのところのみづきから離れ、空振りに終わる。ニヤリと勝負を楽しむかのようにブルースは笑う。

ブルース「なかなかやるな．．！！」

みづき「えへへ・・・！女だからって甘く見ないですよ」

みづきは映画のように棒をクルクルと回し、ポーズを決めブルースを見る。二人は同時にぶつかり合いカキンカキンと剣と槍熱くぶつかりが音を鳴らし合うのが聞こえる。その刹那、ブルースの剣に罅が入りみづきの容赦ない一撃に耐えられず、ついに剣は折れその衝撃で地面に倒れこんだ。

みづき「隙あり！」

高くジャンプし、ブルースに飛びかかるみづき。だが、ブルースに炎山からのチップが入る。

炎山「ネオバリアブル！スロットイン！」

ブルースの腕から新たな剣が出現した。それを目を見開いて見るみづき。

みづき（（そんな・・・！？新しい剣！））

ブルース「喰らえ！デジタルエッジ！！」

高速で三角形を宙に描き、みづきに向かって放つ。

みづき「きああああー!!」

空中に居たためブルースの攻撃を避けられず、もろに攻撃を喰らったみづき。間一髪のところまで炎山に助けられた。

ブルース「炎山様・・・！すみません・・・」

炎山「礼なら後でいい・・・来るぞ！」

爆風は晴れ、みづきの全身を羽織っていたマントを破れ、腰辺りまでになってしまった。みづき自身その場に立っているのがやっとの状態だった。だが、炎山たちは何か様子が変だと気付いた。不安定に体がグラグラ揺れ、野獣のような低い唸り声を上げるみづき。マントから覗かれる顔は凶暴に赤く光る瞳だけが見える。

みづき「グアアアアアアアアッ！！！！」

突如放たれる衝撃波に耐えられず、地面は地割れに会ったように激しく割れる。ブルースも突然のことで避けられず、壁に叩きつけ

られた。

ブルース「クッ・・・！」

目にも留まらずものすごいスピードでみづきはブルース目の前に  
つき、止めの一発を食わせようとした。

ブルース（ここまでかっ・・・！）

炎山「ブルースウー！！」

炎山のバリアのチップは間に合わない。ダメだと思ったその時、  
突然みづきが苦しむように悲鳴をあげた。

みづき「ぐああああ！！うぐっ・・・！！？ぐおおおお・・・！！」

みづきの服の中からまるでブルースを守るうとしてるかのような  
光がみづきを押さえ込んだ。ブルースは何が起きたかよくわからず  
ただ啞然とその姿を見ていると声が聞こえた。

???? (私がこの子をpushさえます・・・その隙に離れて・)  
( )

ブルース「!?!?!?..すまん」

その声の通りにその場から距離を取るブルース。さっきまで見えなかったが、よく見るとみづきの体から邪悪なオーラのような感じの悪いものが出てきている。光はそれを押し戻すように黒いものを封じている。

みづき「ぐっ、ぐああああ!!!!」

光はみづきの体に黒いものを押し戻した。辺りが白に包まれ、ブルースが次に目を開けた時には黒い邪悪なものはなく、少女も消えていた。

ブルース「くそっ・・・!逃げたか」

炎山「ブルース・・・今のはもしかして・・・」

ブルース「はい・・・おそらくは・・・」

ブルースと炎山はあの黒いものがなんかの知っていた。散々ブルースと炎山を苦しめた物だ、忘れてくてもあの時のことは忘れられない。

炎山「・・・ダークチップ・・・！」

小さく隣にいる熱斗たちに聞こえないよう呟く。その重く暗い声は時が経つにしろ消えていく。



辛く、重いその声はどこへ行く？（後書き）

次話はどうなるんでしょうねー！

ロックマン次こそ大活躍できますように！！

パンパンー！！（神頼み）（

## 少女の中に眠るもの

みづき「はぁ・・・！はぁっ・・・！」

なんとかブルースを抜き、バブルマンの行った道へと先に進めた  
がさつきから体の調子がおかしい。頭の中に声が響いてくるのだ。

辛い

苦しい・・・

憎い

悲しい・・・

助けて・・・

虚しい

寂しい……よ……

息切れがさつきから激しい。まるで体の奥に何かが暴れているように……

みづき「んっ……？この声は……」

よろよろと歩きながら、声のする方向に行くとそこには青い男の子と大人っぽい緑色の男性がいた。バブルマンはどうやらその少年二人と戦闘中らしい。

バブルマン「バブルパレード！」

大量の泡を噴き出した砲を華麗に避け、青い少年は片手を銃に変える。

ロックマン「ロックバスター！！」

その攻撃は見事にバブルマンの体に直撃した。砂煙をその場に巻き起こす。

バブルマン「プクーーッ！！」

衝撃で地面に叩きつけられたバブルマンに容赦なくサーチマンはライフルを向ける。

サーチマン「スコープガン！」

バブルマンに照準を合わせ、射撃したがバブルマンに当たる前にその攻撃は一本の槍がブーメランのように飛んでき、防がれた。槍は攻撃をしのぎ、地面へ突き刺さる。

みづき「バブルマン、大丈夫？」

バブルマン「た、助かったプク・・・」

みづきは地面に横たわるバブルマンに優しく手を差し伸べた。その手を掴み何とか立ち上がるバブルマン。

ロックマン「あれは・・・!？」

サーチマン「謎の少女ナビ！」

ロックマンたちは確かにみづきの姿を確認した。熱斗たちにもそ

の姿がモニター越しに見える。

熱斗「見つけたぞ！」

ライカ「サーチマン、少女ナビを確保しろ！」

その声はナビたちに届く。

サーチマン「了解しました、ライカ様」

ロックマン「熱斗君！オペレートよろしく！」

ロックマンたちは戦闘体制に入り、戦闘が始まるつとしたその時

ズゴゴゴンンンンツツツツ・・・！！！！

ロックマン「な、なんだ!？」

地響きがし、かなり強い地震のように辺りが揺れた。ロックマンたちが戸惑ってる内に、宙から新たな三体のナビの侵入者がやってきた。その姿を見てみづきは驚愕の顔をする。

みづき「あ、あなたたちは・・・!?」

???「ヒッヒッヒ!! やつと見つけたぜ!」

???「よくもさつきはやってくれたな!」

???「今度こそ、ぶつ潰してやるう!!」

屋根をぶち抜いてきたせいかな煙であまり姿が見えないその姿の声の主たちは恨みがましくみづき言う。だが、みづきは全然顔色一つも変えない。そしてついに煙が晴れ姿が見える。

みづき「あ、あなたたちは・・・!!・・・誰だけ・・・?」

ズコーーッッ!!

三人は思わずその場でずっこける。ギャンギャンと三体のナビは

言う。

悪人ナビA「なめてんのかあ！てめええ！！」

みづき「あっ！思い出した！確か、魚兄弟だっけ？」

悪人ナビB「違いよ！フィッシュブラザーだよ！！なんで日本語に変換すんだよ！！」

みづき「あっ、ごめんなさい！あまりにどうでもよかつたから忘れてたわ・・・」

悪人ナビC「何気にひどいこと言ってるじゃねえよ！！」

みづきのポケに全力にツッコム、フィッシュブラザーズ。

ロックマン（な、なんか面倒くさいな・・・）

サーチマンもあまりのことに呆然としていたが、すぐ我に振り返りを向ける。

サーチマン「お前ら何者だ！そいつらの仲間か！！」

悪人ナビC「はあ？俺たちはこいつに用があつて来たんだよ・  
・、てめえらはここでお寝んねでもしときな！」

手を銃に変え、容赦なく辺りに乱射する悪人ナビC。

ロックマン「くっ・・・！なんて乱暴な奴らなんだ・・・！」

熱斗「一気に片づけるぞ！ロックマン！！」

ライカ「我々も行くぞ！」

サーチマン「はあ！」

熱斗とライカはPETにチップを三枚連続で入れた。

熱斗・ライカ「プログラム・アドバンス！」



熱斗「バルカン！トリプルスロットイン！」

ロックマンの両腕が二つに重なり、巨大なバルカンが姿を見せる。

熱斗「ムゲンバルカン！」

ライカ「ヨーヨー！トリプルスロットイン！」

サーチマンの右手がヨーヨーへと姿を変える。

ライカ「ヨーヨーグレート！！！」

ロックマン・サーチマン「はああああ！！！！！」

ロックマンのムゲンバルカンとサーチマンのヨーヨーグレートの攻撃が重なり、一撃が悪人ナビたちにぶつかる。

悪人ナビA・B・C「ぐああああ！！！！！」

避けられず、ボーリングのピンのように跳ね飛ばされる悪人ナビたち。地面に叩き伏せられた。

悪人ナビA「な、なんだあいつら・・・！」

悪人ナビB「あ、兄貴ヤバいですよ！逃げましょう・・・！」

そんな話の中、悪人ナビの三人目が奇妙な声を上げ始める。

悪人ナビC「う、ががああ・・・！！！」

悪人ナビA「どうしたんだ？ブラザー・・・？」

心配して体に手を伸ばした瞬間、悪人ナビCから黒い影が溢れ出た。

悪人ナビB「うわあああー！！！？？」

悪人ナビA「な、なんだ！？た、助けてくれえ！う、うわあああー！！！！！」

悪人ナビたちは吸い込まれるように黒い影に姿を消した。ロックマンたちも突然のことで驚愕している。

サーチマン「一体あれはなんなんだ！？」



私は必死に耳を塞ぐが、頭の中に響いてくる。そんな時、私の中に違う声が聞こえる。

（私が助けてあげる・・・みづきちゃん・・・）

私は何の疑いもなくその言葉を信じた。早く頭の中に響く、この気持ち悪い不快なものを消し去りたくて・・・

## 少女の中に眠るもの（後書き）

なんか途中で終わってしまったけど、続きは早めに書きますね〜^^  
誰か感想でも書いてくれないかな・・・？  
読者のみなさん、いつでも待ってマース！！

永久に君と・・・

悪人ナビ「ぎゃああああ!!!!!!!!!」

すでに原型は無くして、ドロドロとしたスライムの様な、なんと気持ち悪い生き物に変わっていた。

サーチマン「もうダメだ。精神プログラムが完全に暴走している!止められない・・・!!」

ロックマン「あきらめちゃダメだ!!何か方法が・・・」

???「ないわ、そんな方法」

ロックマン・サーチマン「!!!!」

後ろを見るといつの間にかに少女ナビが立っていた。

サーチマン「(こいつ・・・!いつの間・・・!!)」

ロックマン「(全然気づかなかった・・・!)」

驚愕の顔しているロックマンたちの顔が可笑しかったのか銀髪の少女は笑う。

???「ここは私にまかせて・・・」

ニッコリと笑っているがその笑みは何となく怖かった。

???「さあ・・・!宴の始まりよっ・・・!!」

少女の目は怪しく光る。不思議なテンポで流れる音、少女のマン  
トから淡く紫色の光が漏れ出てる。

月の青空 誓いの聖地 悲しみと絶望の砂時計が壊れた時  
運命は動き出す・・・  
孤独を愛でる少年少女は何思う?

悪人ナビ「ぐあ・・・!ぐおおおお!!!!!!」

全てを飲み込もうとしていた手が止まり、その場に苦しみだす。

熱斗「この声は・・・!?」

ロックマン「もしかしてっ・・・!?」

ただ一人の魔女 ずっと探していたものはまだ見つからない  
走馬灯のように君が見える

悲しみを広げよう そうしたら君が迎えに来てくれるはずだが

ら・・・

愛を探してまた壊れる

心果がなく百合のように散りゆく

深き森に囲まれ、点々と輝く星を見る

ココへ来て 一緒に話そう

その声はきつと君には届かない 今もそして未来も・・・

君はきつと裏切りの歌を唄うだろう

僕も君と同じ歌を唄う

傷口に復讐を塗り付けて

悲しみを広げよう そうしたら君が迎えに来てくれるはずだが

ら・・・

愛を探してまた壊れる

心果がなく百合のように散りゆく

僕の熱を君にあげる

全てが壊れる日もただ君と一緒にいたい

それが破滅の願いとしても

僕は君のことを願う・・・



闇の中、今も誰かを思い続ける  
影と光の境目

堕天使となっても羽ばたくだろう  
君を取り戻すためなら僕は戦う  
たとえ、それが自分じゃなくなっても・・・

「忠誠ヲ誓い共ニ生キテイコウ」

羽を失くした天馬　ただ君に逢いたくて  
全てが嘘だとしても

それでも光に手を伸ばした　届かないと知ってても　ただ伸ば  
した

夢は果がなく散ってた・・・

僕の熱を君にあげる

全てが壊れる日もただ君と一緒にいたい  
それが破滅の願いとしても  
僕はただ君のことを願う・・・

悪人ナビC「があああ！！！！！！？」

ブロックのように小さくなり、パンッ！と風船が割れるように  
爆発していた。

サーチマン「暴走したナビをたった一人で止めた・・・！！」

一人でこの科学省も傷つけないで暴走したナビ三体をやっつけた

ロックマン「ねえ！もしかして、君は・・・！！」

「???」・・・?」

ロックマンは少女が被っていたマントを取る。すると、そこには  
ロックマンたちがよく知る顔があった。

みんな「「「あぁっつー！！！！??」」」

銀髪の髪に赤い瞳だが、間違いないみづきだ。ロックマンたちが  
驚愕してる中、突然みづきがロックマンの中に倒れた。

ロックマン「み、みづきちゃん!？」

いつものみづきの黒と茶色の髪の毛に戻った。ロックマンはその  
場にもづきを寝かせ、息を確かめる。

熱斗「ロックマンツ・・・!」

ロックマン「大丈夫・・・息はあるよ」

やっとホッとするオペレーター三人。

炎山「でも、なぜ人間のみづきが電腦世界なんかに・・・」

ライカ「分からない・・・一体、電腦世界と現実世界で何が起きているんだ・・・？」

光「お、俺！みんなに知らせてくる！！」

そう言い、慌てて熱斗はみづきを探しているみんなのPETへと電話を掛ける。

永久に君と・・・（後書き）

ご、ごめんさないいいいい！！！！

すぐ投稿すると言ったのにこんなに遅くなってしまっで・・・！

本当に申し訳ない><！！

海より深く反省します！！！！

ついでにこの歌はオリ曲です！

みなさんに気に入っていただけると嬉しいのです^^

ボーカロイドの曲、もうそろそろ出そうかな？

何かいい歌あつたら私に感想を出して教えてください！！！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3339m/>

---

ロックマンエグゼ 奇跡のロボットと科学者・・・！

2011年10月7日14時01分発行